

木曾川総合水系環境整備事業

説明資料

平成23年 9月 6日

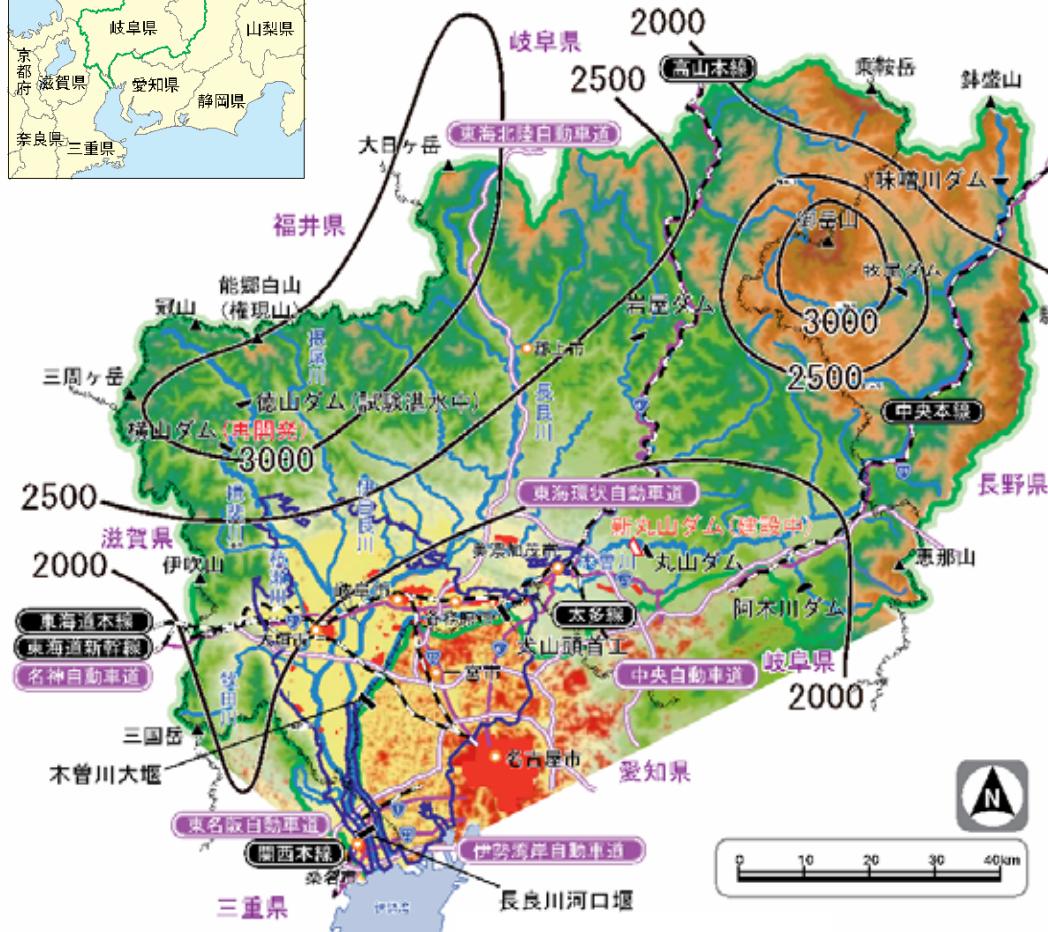
国土交通省 中部地方整備局
木曾川上流河川事務所
木曾川下流河川事務所

目 次

1．事業の概要	
（1）流域の概要	3
（2）事業の目的	6
2．計画内容と事業の投資効果	8
3．費用対効果分析	24
4．評価の視点	
（1）事業の必要性等に関する視点	
1）事業を巡る社会経済情勢等の変化	27
2）事業の進捗状況	28
（2）事業の進捗の見込みの視点	29
（3）コスト縮減や代替案立案等の可能性の視点	30
5．県への意見聴取結果	31
6．対応方針（原案）	31
7．事後評価に準ずるフォローアップ	
（1）計画内容と事業の効果	32
（2）費用対効果分析	50
（3）評価の視点	
1）社会経済情勢の変化	51
2）今後の事後評価の必要性	52
3）改善措置の必要性	52
4）同種事業の計画・調査のあり方や事業評価手法の見直しの必要性	52
（4）対応方針（案）	52

1. 事業の概要

(1) 流域の概要



木曽三川流域諸元

流域面積
9,100km²

〔 木曽川:5,275km²
長良川:1,985km²
揖斐川:1,840km²〕

幹川流路延長
木曽川:229km、長良川:166km、揖斐川:121km

流域内の主要都市
岐阜市、大垣市、一宮市、江南市、桑名市など

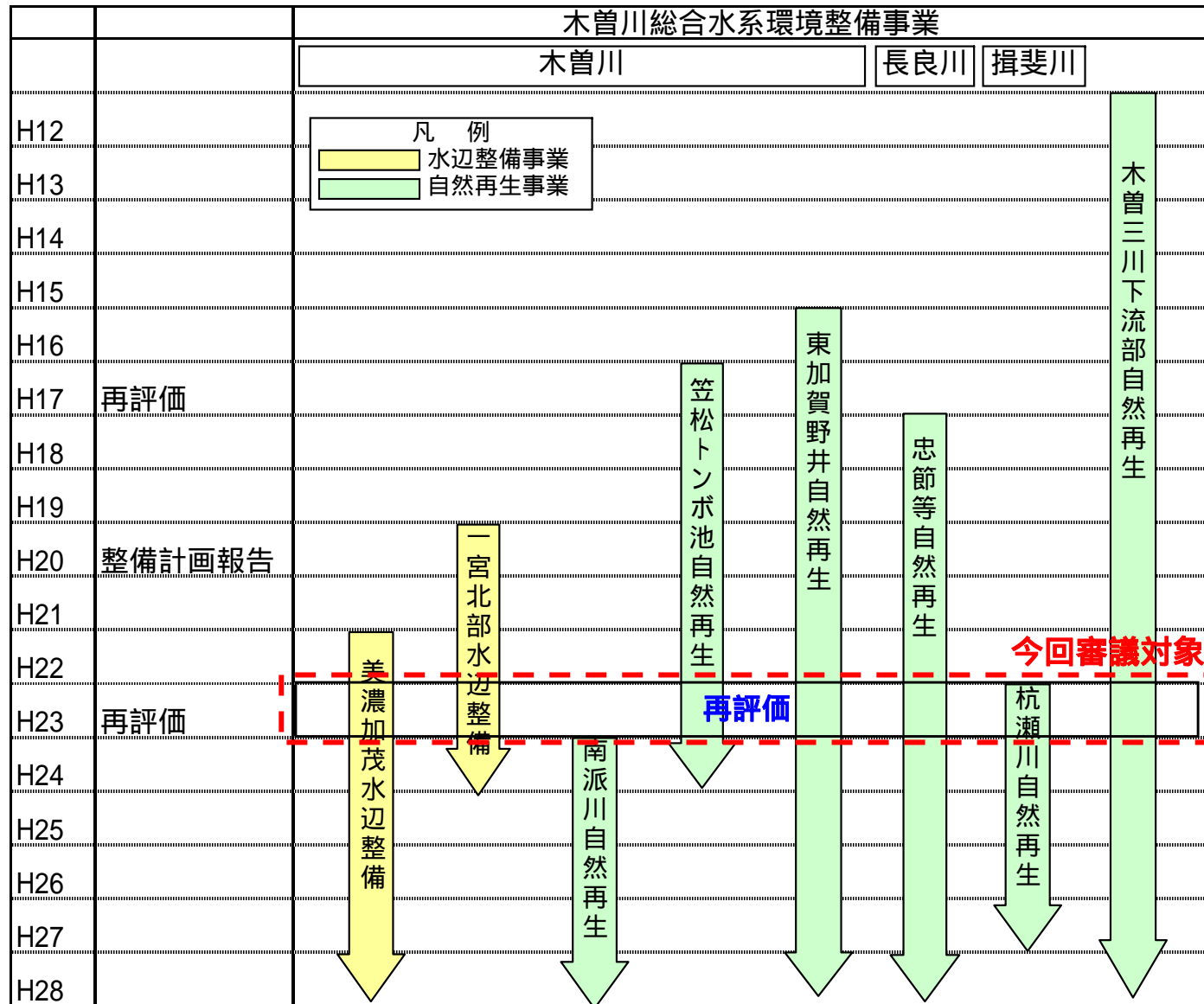
流域内人口 約190万人

年平均降水量 約2,500mm(平野部)
約3,000mm(山間部)

木曽川流域図

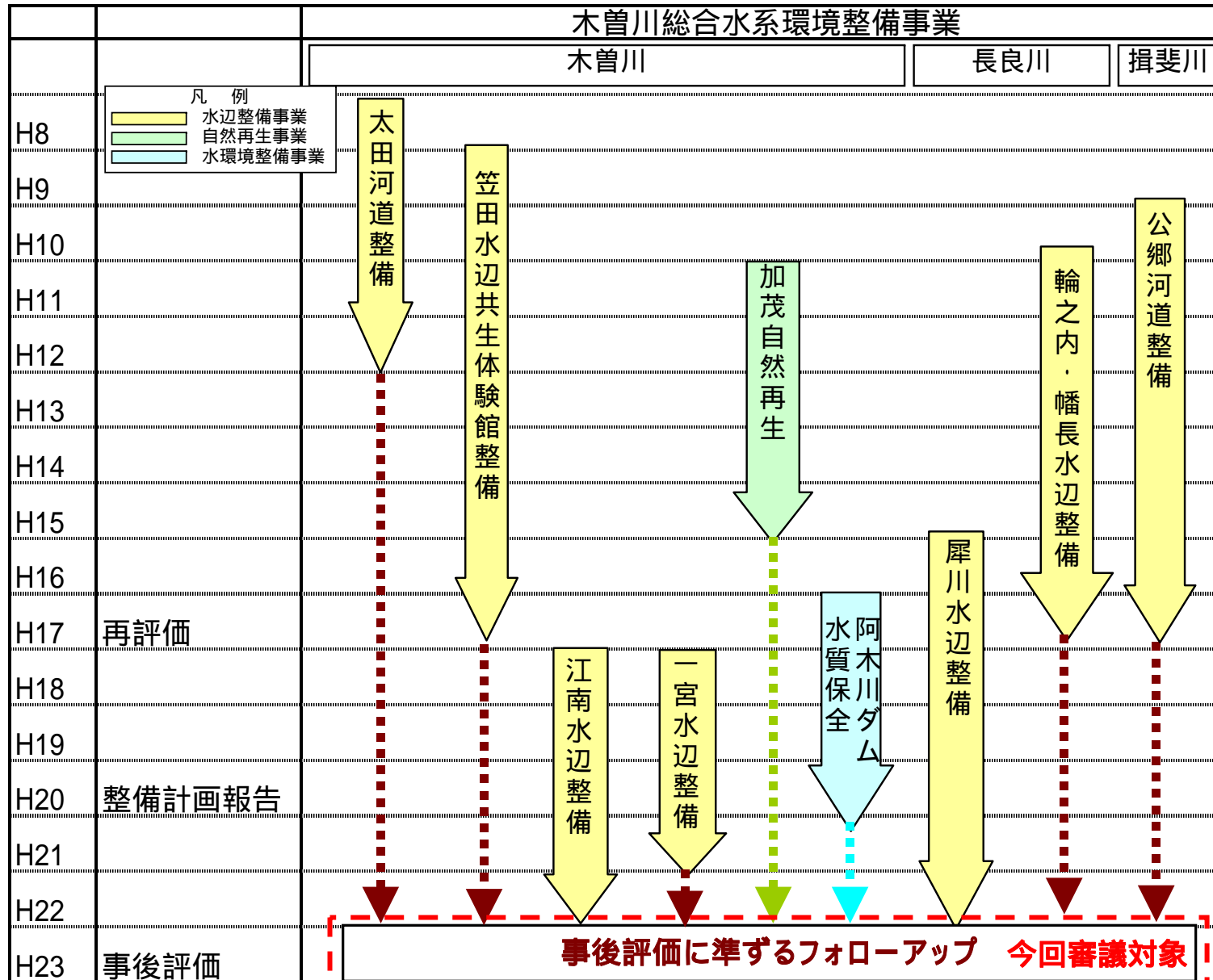
(今回評価について)

(再評価)



(平成20年整備計画報告後、一定期間(3年間)経過により再評価を実施)
 調整中の事業は、今回評価の対象としないため、記載していない。

(事後評価に準ずるフォローアップ)



(事業が完了した個別箇所について、事後評価に準ずるフォローアップを実施)

(2) 事業の目的

平成20年3月28日に策定した「木曽川水系河川整備計画」に基づき、河川環境の整備と保全、川と人とのふれあいの増進を目指す。

- ・ 良好な自然環境の保全を図りつつ、失われるなどした環境の再生に努める。
- ・ 木曽三川を特徴づける歴史的、自然的、文化的な河川景観や親水空間としての良好な水辺景観の保全・整備を図る。

(再評価)



対象事業の実施箇所

調整中の事業は、今回評価の対象としないため、記載していない。

(事後評価に準ずるフォローアップ)

公郷河道整備



加茂自然再生



太田河道整備





犀川水辺整備



江南水辺整備



笠田水辺共生体験館整備



一宮水辺整備



輪之内・幡長水辺整備



● 自然再生事業

■ 水辺整備事業

河川名	事業名	目的	内容	期間	
木曽川	太田河道整備事業	安全に水辺に近づき、環境学習の場としての活用を図る。	多自然型護岸整備 高水敷整備 せせらぎ水路整備 公園整備	H8 - 10 (H8 - 12)	
	笠田水辺共生体験館整備事業	川の仕組みや川と共生するための技術を、子どもたちや市民が実際に体験し、実験しながら学べる場を確保する。	水辺共生体験館整備	H9 - 17 (H9 - 17)	
	江南水辺整備事業	水辺へのアクセスや利用の安全性を確保する。	親水護岸整備 高水敷整備 緩傾斜堤防整備 散策路整備	H18 - 20 (H18 - 22)	
	一宮水辺整備事業	水辺へのアクセスや利用の安全性を確保する。	親水護岸整備 高水敷整備 散策路整備	H18 - 19 (H18 - 21)	
	自然再生	加茂自然再生事業	周辺環境と調和した景観形成を図る。	堤防緑化	H11 - 15
長良川	水環境整備	阿木川ダム水質保全事業	アオコの発生抑制を図る。	曝気循環設備	H17 - 20
	水辺整備	犀川水辺整備事業	子供たちの自然体験・環境学習の場としての活用を図る。	親水護岸整備 ワンド整備 高水敷整備 遊歩道等の整備	H17 - 20 (H16 - 22)
長良川	水辺整備	輪之内・幡長水辺整備事業	子供たちが川とふれあうことができるような場としての活用を図る。	親水護岸整備 高水敷整備 グラウンド等の整備	H14 - 17 (H11 - 17)
	水辺整備	公郷河道整備事業	親水性を考慮し、利用の安全性を確保する。	多自然型護岸整備 高水敷整備 スポーツの原っぱ等の整備	H10 - 12 (H10 - 17)

対象事業の実施箇所

(期間欄)
 上段：国交省整備期間
 下段：関係機関の整備を含む事業全体の整備期間

2. 計画内容と事業の投資効果（再評価）

美濃加茂水辺整備

整備の必要性

<背景>

- ・美濃加茂市は、中山道太田宿、太田の渡し跡といった歴史・文化史跡や、飛騨木曽川国定公園、名勝木曽川に指定された急流の断崖と奇岩がくりなす木曽川の景観が地域資源となっており、これらを活かしたまちづくりを進めている。
- ・当該地区は、昭和58年美濃加茂災害の後に特殊堤が整備された。
- ・木曽川緑地ライン公園などの利用施設が高水敷に整備され、利用が行われている。

<課題>

- ・当該地区は、局所的な河岸洗掘が見られ、歴史・文化史跡や上下流の公園との連続性が確保されていないなど、安全な利活用が妨げられている。

<対策>

- ・河川管理の効率化、利用の安全性を確保するため、親水護岸、高水敷整備を実施する。なお、基盤整備後、美濃加茂市が散策路等を整備する。

美濃加茂市マスタープランでは、駅南地区、中山道地区と木曽川の親水レクリエーションゾーンとの回遊性の確保が位置付けられている。



整備内容

- ・親水護岸整備(延長910m) (国)
- ・高水敷整備 (140千㎡) (国)
- ・散策路整備 (美濃加茂市)



整備前

洗掘箇所

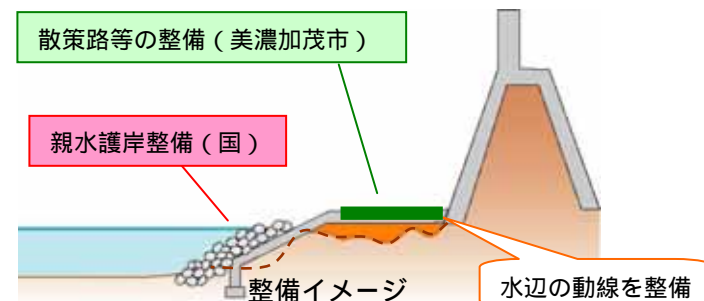


整備後（イメージ）

洗掘を防ぐと共に、水辺の動線を確保

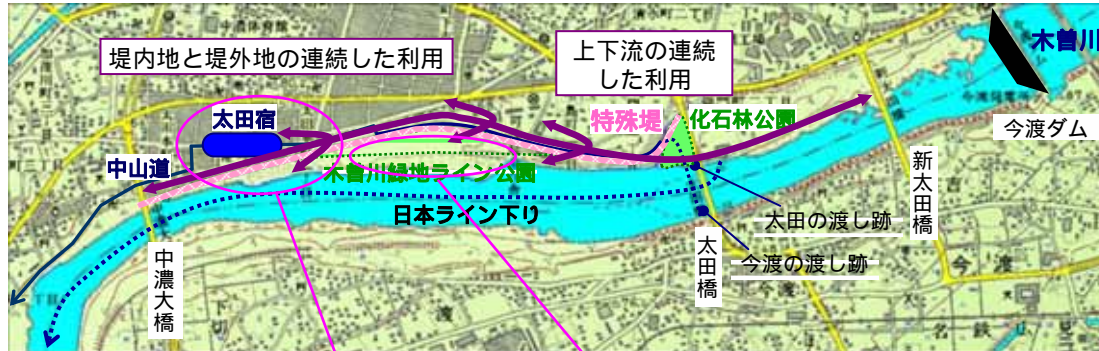


A-A'断面



事業の投資効果

- ・親水護岸、高水敷等を整備することにより、河川管理の効率化や親水性の向上による利用の活性化が期待される。



利用状況 (イメージ)



堤内地の拠点と川との連続した利用が期待される。



高水敷の利用がより活発になることが期待される。



堤防天端で休憩施設等として活用されることが期待される。



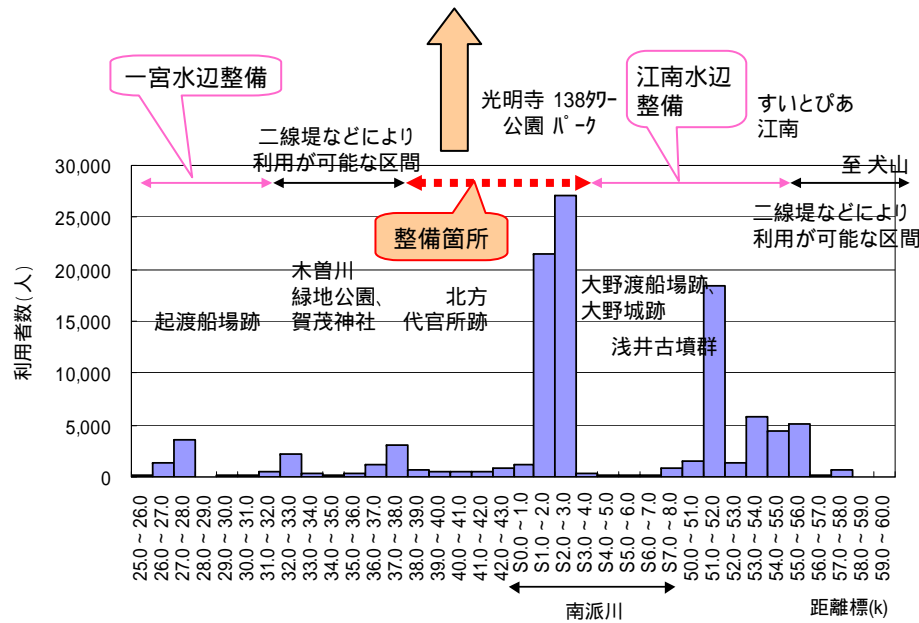
イベントなどの場としてさらに活発に利用されることが期待される。

日常の潤いや安らぎ、美しい景観等を提供する木曾川をシンボルとして、景観・歴史・文化等の河川が有する地域の魅力ある資源を活用したネットワークが形成される。

事業の投資効果

・拠点多く利用が盛んな区間であり、上下流の連続性を確保することにより、河川管理の効率化や連続して利用しやすい水辺空間として活用されるようになった。

木曽川左岸でも利用が盛んな区間であり、上下流の施設が結ばれ、連続して利用しやすい水辺空間として活用



木曽川左岸の利用実態

(出典：河川水辺の国勢調査 利用実態調査)
年7日間の調査日における利用者数の合計値

利用状況

上下流連続した利用が可能となる。

レクリエーションの場として利用されている。

自転車で容易に乗り入れ、利用できるになっている。

親水の間として利用されている。

散策路の利用 高水敷の利用

自転車での来訪利用 親水護岸の利用

南派川自然再生

整備の必要性

<背景>

・南派川は、かつては河原が広がり、カワラハハコなどの河原固有植物が生育できるような環境となっていた。

<課題>

・南派川では、シナダレスズメガヤ*やハリエンジュ*等の外来種が拡大しており、河原固有植物の生育環境への影響が懸念される。

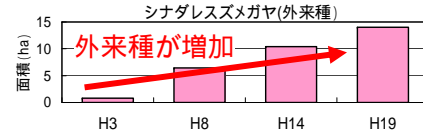
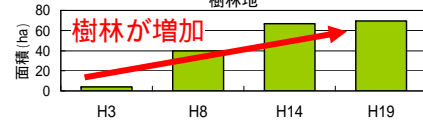
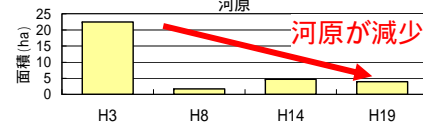
* 外来生物法での要注意外来生物



樹林が繁茂したかつての河原



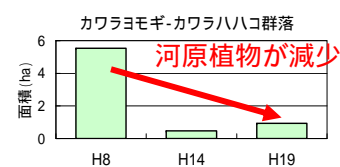
河原に侵入したシナダレスズメガヤ (要注意外来生物)



南派川における河原固有植物の確認の変遷

種名	H3	H8	H14	H19
カワラサイコ				
カワラヨモギ				
カワラマツバ				
カワラハハコ				

(出典：河川水辺の国勢調査)



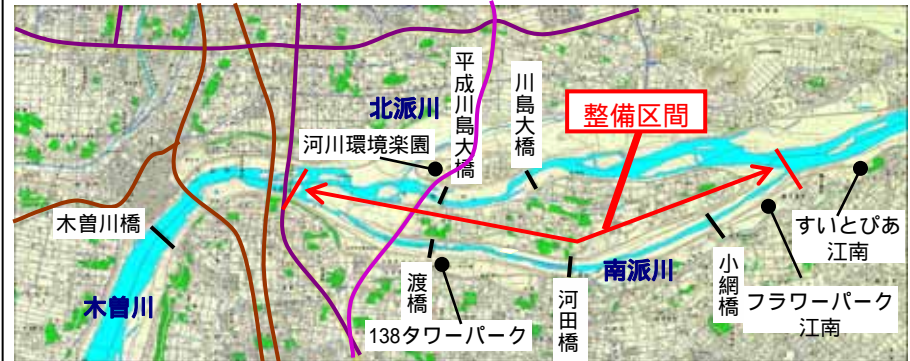
南派川における河原や植生の変遷 (出典：河川水辺の国勢調査)

<対策>

・流水環境を確保して河原を再生させることにより、外来種の拡大を抑制し、河原固有植物の再生を図るため、河道掘削、樹木伐開を行う。

整備内容

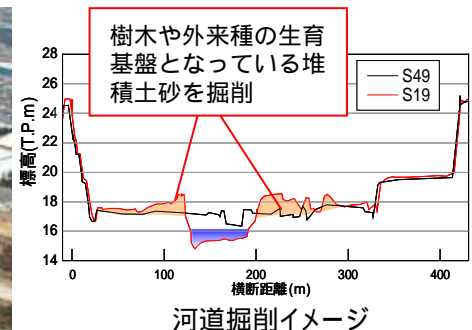
- ・河道掘削 (34千m³)
- ・樹木伐開 (777千m²)



整備前



樹林が繁茂し、外来種が侵入した低水路 (小網橋下流)



整備後 (イメージ)



河原固有植物が生育する河原が回復したイメージ

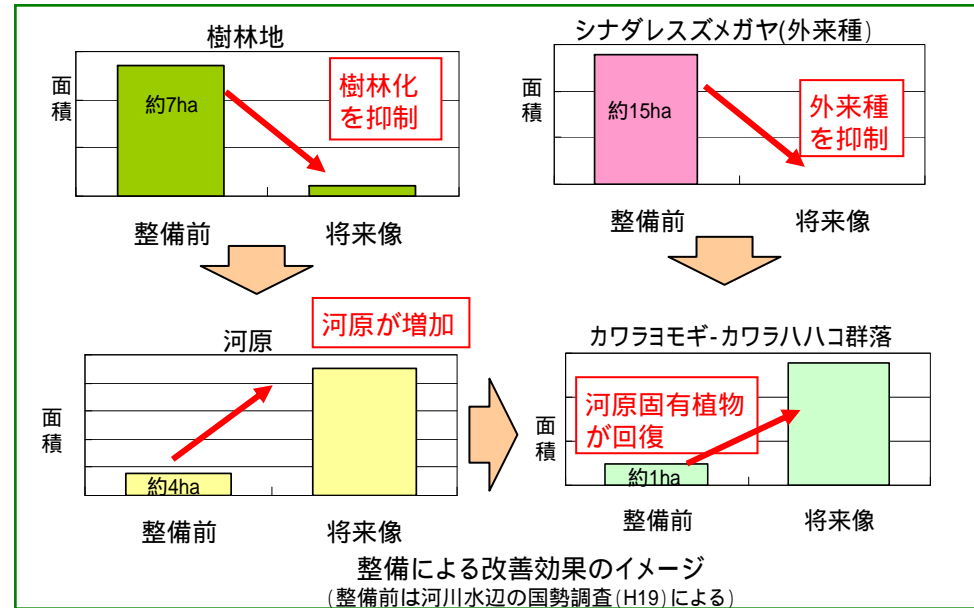


事業の投資効果

- ・河道掘削、樹木伐開により、河原が回復し、カワラハハコ等の河原固有植物の生育環境が回復する。
- ・自然観察や環境教育の場として活用される。



河原固有植物が生育する河原が回復したイメージ



カワラハハコ



カワラサイコ
(愛知県レッドデータブック
準絶滅危惧種)

回復が期待される河原固有植物

種名	H3	H8	H14	H19	将来
カワラサイコ					
カワラヨモギ					
カワラマツバ					
カワラハハコ					

(出典：河川水辺の国勢調査)

今後整備を行う事業であるため、整備効果は今後モニタリングを行い確認していく。

笠松トンボ池自然再生

整備の必要性

<背景>

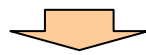
- ・笠松トンボ天国は、トンボ類など多種多様な水辺の生きものが生息している。
- ・「トンボ天国保存地」(笠松町)、「ふるさといきものの里」(環境省)、「岐阜県の名水50選」、「水と緑の環境百選」などに指定され、古くから笠松町、NPO、小学校等による保全活動が続けられている。
- ・笠松町による公園整備が隣接して行われており、一体として管理を行っている。

<課題>

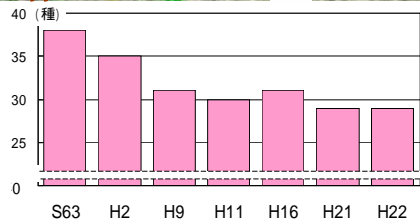
- ・トンボ池の干上がりや底泥の堆積、嫌気化等による水質悪化、竹林の繁茂による草地の減少など、トンボ類の生息環境が劣化している。



昭和29年当時のトンボ池周辺の状況(出典:写真集かさまつ百年)



現在のトンボ池(H18年、竹林伐開前)



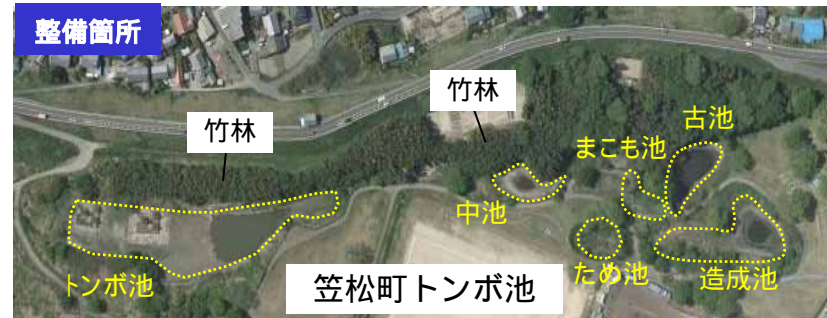
干上がり、水面が縮小したトンボ池

<対策>

- ・トンボ類の生息環境の改善を図るため、池の掘削、底泥除去、竹林伐開などを行う。

整備内容

- ・池の掘削及び底泥の除去 (2.2千 m^3)
- ・竹林の伐開・草地を再生 (4.2千 m^2)
- ・雨水排水処理
- ・外来種の駆除



事業の投資効果

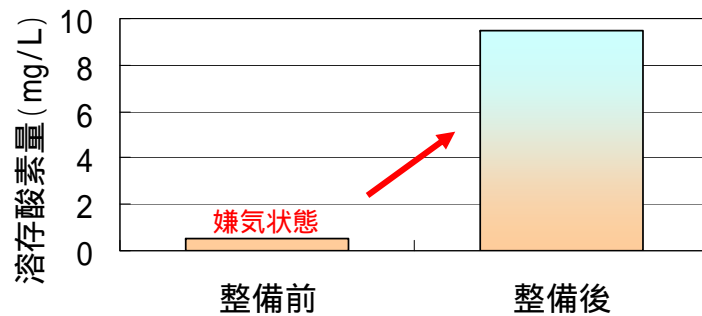
- ・底泥除去により、池中の酸素濃度や湧水が回復するなど水質が改善し、水生植物が増加し、トンボの休息場、産卵場、ヤゴの隠れ場などが回復する。また、草地の増加により、トンボの餌となる多くの昆虫の生息環境が回復する。
- ・自然観察や環境教育の場として、地域住民によって活用されている。



底泥除去後

湧水が回復

トンボ池の酸素濃度の変化（底層）



ヤゴの生息環境が改善される。

回復が期待されるトンボ



ムスジイトンボ

(岐阜県レッドデータブック準絶滅危惧)



ベニイトンボ

(岐阜県レッドデータブック絶滅危惧 類)

かつてのように、いろいろな種類のトンボがたくさん飛び交い、希少なトンボが生息する水辺環境を回復する

地域による取り組み



市民団体の活動状況
(トンボ池を守る会)



子供たちによるヤゴの放流

地域と連携した取り組みや環境教育の場などとして活用されている。

東加賀野井自然再生

整備の必要性

<背景>

- 木曽川中流域のワンドには、貴重なタナゴ類やその産卵に必要な二枚貝が生息し、地域で保護活動が取り組まれている。



昭和56年当時の木曽川

<課題>

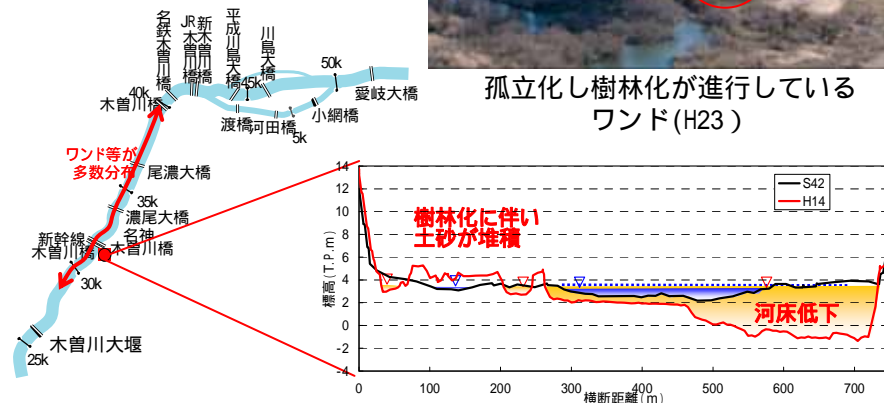
- 水域と陸域の高さの差が拡大し、ワンドが本川と切り離されるとともに、底泥堆積や水質悪化が進行し、タナゴ類や二枚貝の生息場となる湿地環境の劣化が進行している。

ワンド：川の流れから切り離された入り江のようなよどみのこと。川とは異なる環境のため、独自の生態系を形成している。



タナゴ類

孤立化し樹林化が進行しているワンド(H23)

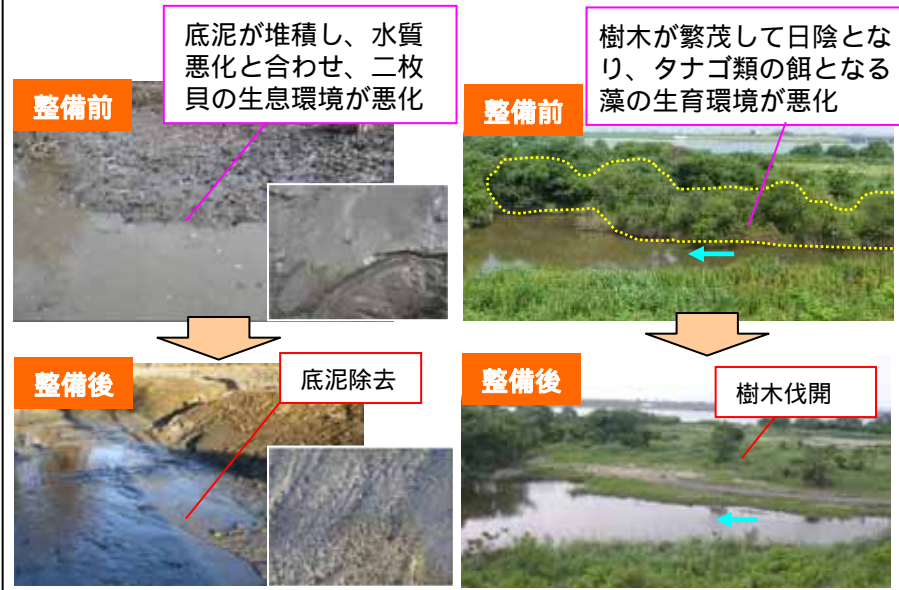


<対策>

- タナゴ類や二枚貝の生息環境の改善を図るため、底泥の除去、樹木伐開、盤下げ(本川との連続性回復)を行う。

整備内容

- 底泥の除去 (7.3千 m^3)¹
 - 樹木伐開、浅場の造成 (伐開面積24.2千 m^2)
 - 盤下げ (7.3千 m^3)¹
- 1：底泥除去と盤下げ合わせた数量

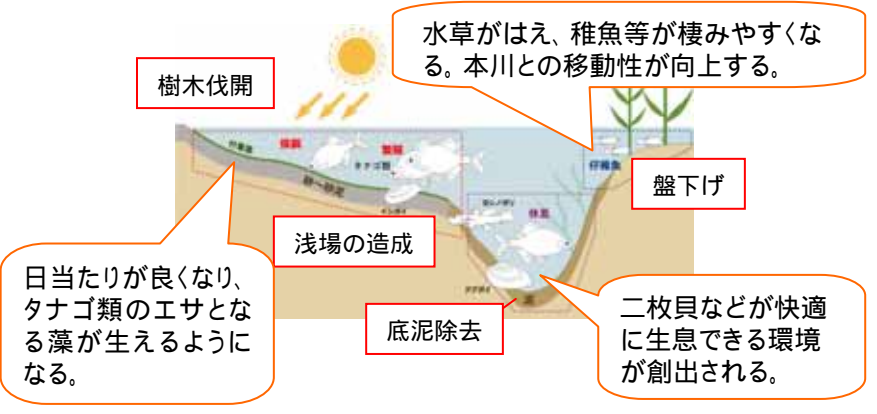


整備前

整備後

底泥除去

樹木伐開



事業の投資効果

- ・底泥除去、樹木伐開、盤下げにより、底質や水質が改善され、タナゴ類の餌となる藻類の増殖など、タナゴ類や二枚貝の生息環境が回復する。
- ・地域での保護活動を通じた自然観察や環境学習の場として活用されている。

整備後



底泥除去後

二枚貝の生息環境が改善される。



イシガイ（稚貝）

地域による取り組み



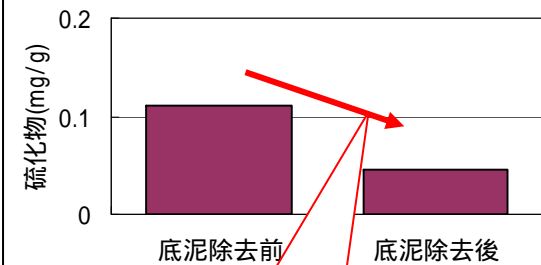
イタセンパラ保護協議会
パトロール状況（啓発活動）



イタセンパラ保護協議会
会議の状況

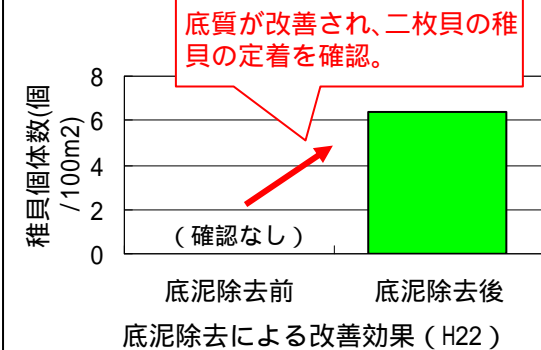
イタセンパラの保護に向けて、地域一体となったパトロール、啓発活動を実施している。

底質中の硫化物の含有量



硫化物の含有量が低下し、底質の改善効果が見られる。

二枚貝の稚貝確認状況



底質が改善され、二枚貝の稚貝の定着を確認。

底泥除去による改善効果（H22）

忠節等自然再生

整備の必要性

<背景>

・長良川中流域は、かつては河原が広がり、カワラサイコなどの貴重な河原固有植物が生育できるような環境となっていた。

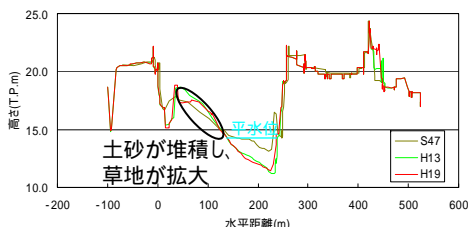
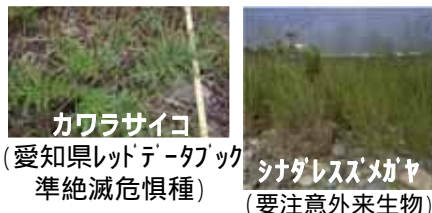
<課題>

・土砂の堆積による草地の拡大、シナダレスズメガヤ*等の外来種の拡大など河原固有植物の生育環境への影響が懸念される。

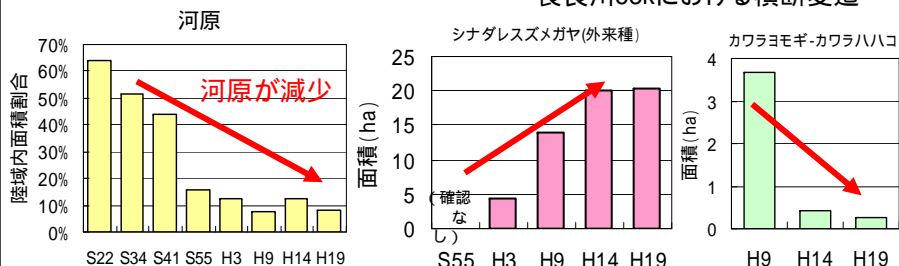
* 外来生物法での要注意外来生物



草地が拡大した現在の長良川の水辺



長良川53kにおける横断変遷



長良川中流部における河原や植生の変遷

<対策>

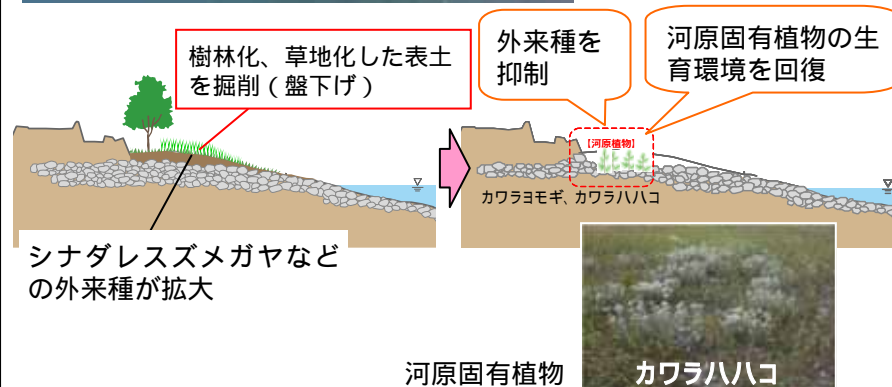
・河原を再生させることにより、外来種の拡大を抑制し、河原固有植物の再生を図るため、河道掘削（盤下げ）を行う。

整備内容

・樹林化、草地化した表土の掘削(盤下げ) (202千m³)



整備後(イメージ)



河原固有植物

カワラハハコ

事業の投資効果

- ・河道掘削により、河原が回復し、カワラハハコ等の河原固有植物の生育環境が回復する。
- ・自然観察や環境教育の場として活用される。

整備後（イメージ）



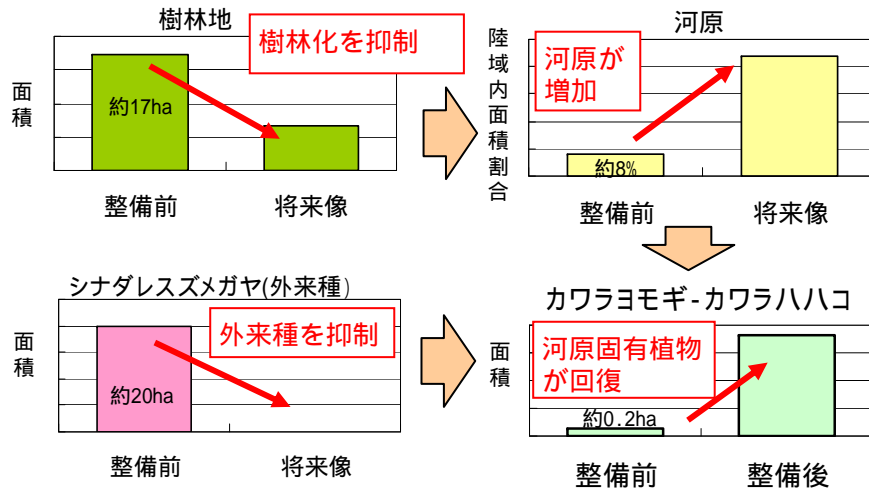
河原が回復したイメージ



カワラハハコ



カワラサイコ
(愛知県レッドデータブック準絶滅危惧種)



整備による改善効果のイメージ
(整備前は河川水辺の国勢調査(H19)による)

河原が回復することで、河原特有の植物等の生育・生息環境が回復する。

回復が期待される河原固有植物

種名	H3	H9	H14	H19	将来
カワラハハコ					
カワラヨモギ					
カワラマツバ					
カワラサイコ					
カワラアカザ					

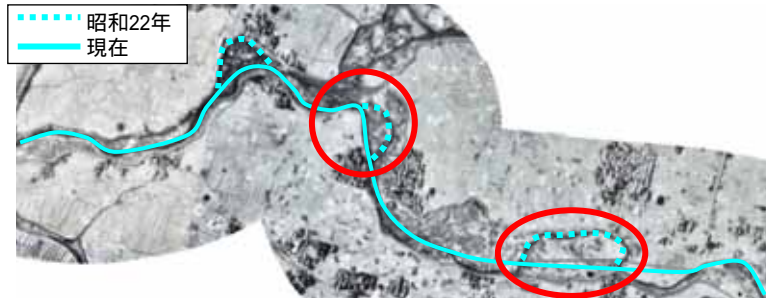
(出典:河川水辺の国勢調査)

杭瀬川自然再生

整備の必要性

<背景>

- 杭瀬川は、かつては蛇行を繰り返し、緩やかな流れを好むヤリタナゴ類やメダカ等の小型魚類や、ササバモ等の水生植物が生息・生育する緩流域環境であった。



昭和22年当時の杭瀬川と現在の河道

<課題>

- 河川整備による直線化の際、旧河道を湿地環境として残したが、土砂の堆積や樹林化により緩流域環境が劣化している。



土砂堆積や樹林化が進行した旧河道の状況

<対策>

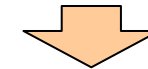
- 緩やかな流れを好むヤリタナゴ等の小型魚類や水生植物の生息・生育環境の改善を図るため、旧河道の掘削や樹木伐開を行う。



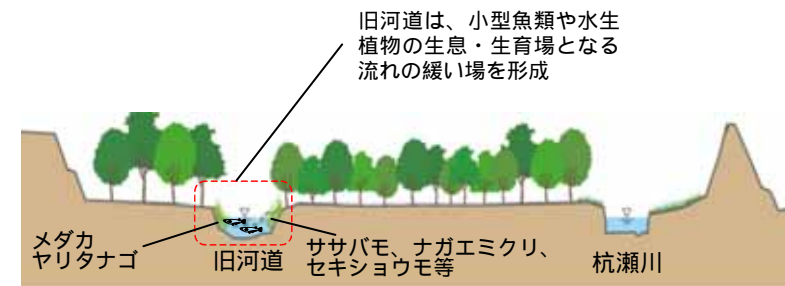
ヤリタナゴ
(環境省レッドリスト準絶滅危惧種)

整備内容

- 旧河道の掘削 (30千 m^3)
- 樹木伐開 (27千 m^2)



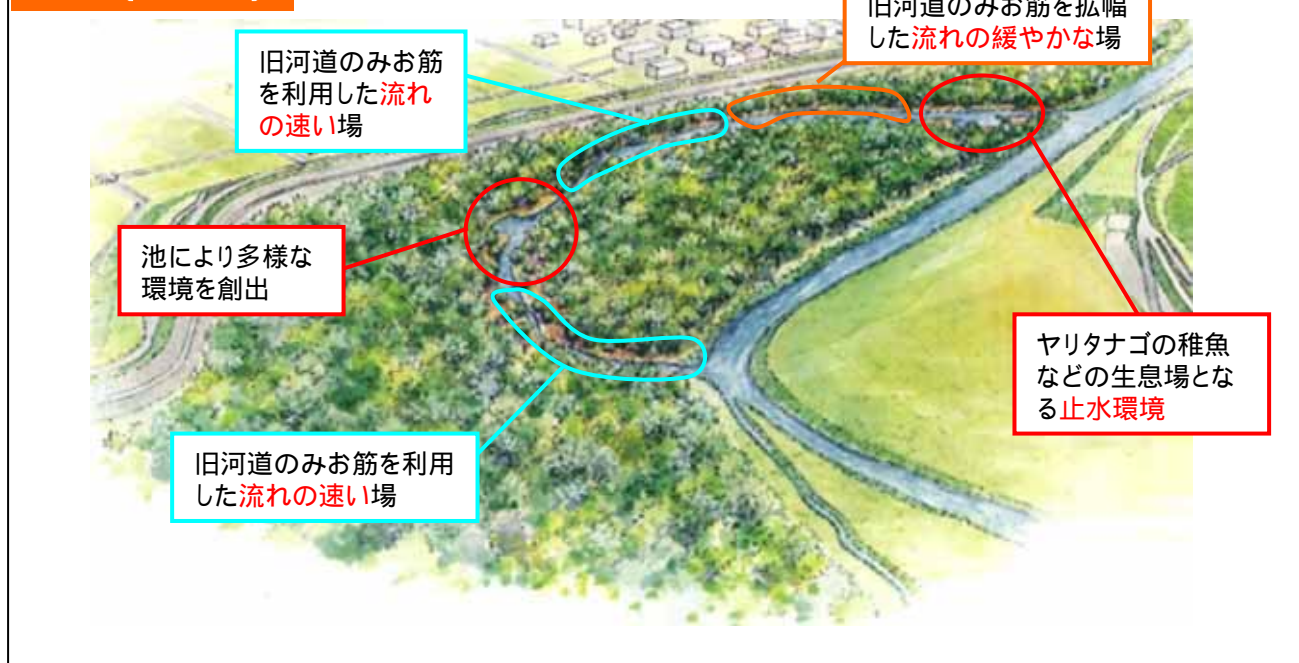
整備後 (イメージ)



事業の投資効果

- ・河道掘削により、緩流域の環境が回復し、タナゴ類などの小型魚類や水生植物の生息・生育環境が回復する。
- ・自然観察や環境教育の場として活用される。

整備後（イメージ）



今後整備を行う事業であるため、整備効果は今後モニタリングを行い確認していく。

回復が期待される生物

植物	魚類	貝類
ササバモ	ヤリタナゴ	マツカサガイ
ナガエミクリ	アブラボテ	トンガリササノハガイ
セキショウモ	メダカ	イシガイ
センニンモ		



ササバモ
（岐阜県レッドデータブック
絶滅危惧II類）



ヤリタナゴ
（環境省レッドリスト
準絶滅危惧種）



メダカ
（環境省レッドリスト 絶
滅危惧II類）



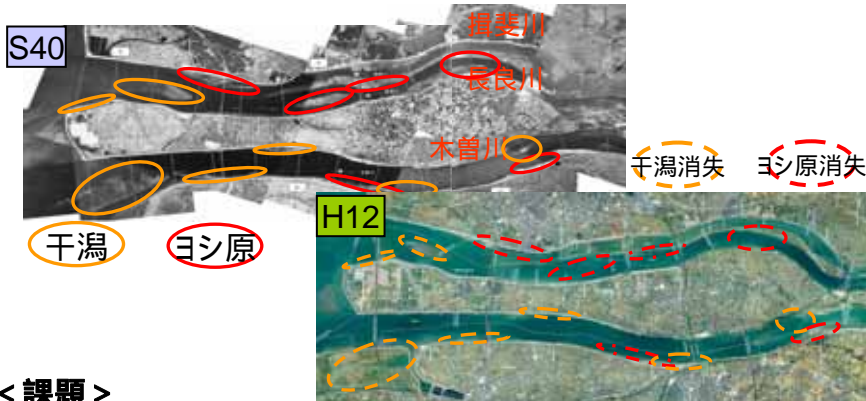
マツカサガイ
（岐阜県レッドデータブック
絶滅危惧II類）

木曽三川下流部自然再生

整備の必要性

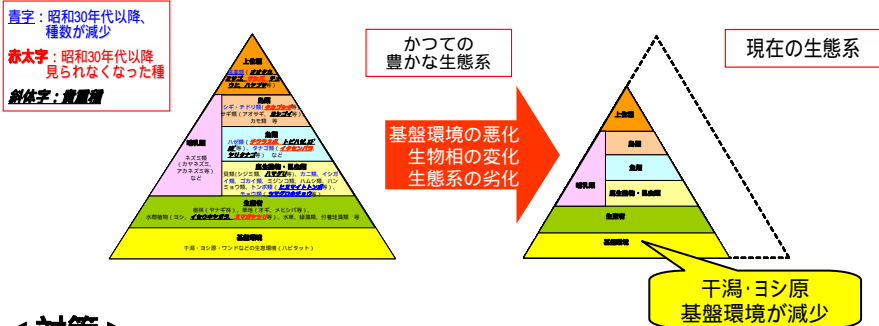
< 背景 >

- 木曽川下流域には、かつては干潟・ヨシ原などが広がり、「良好な水際環境」が保たれ豊かな基盤環境の上に、魚類、貝類など、多様な生物が生息する環境であった。



< 課題 >

- 昭和30年代後半以降の広域地盤沈下、築堤、干拓等により、干潟・ヨシ原が減少し、生態系が劣化（生態系ピラミッドが縮小）した。

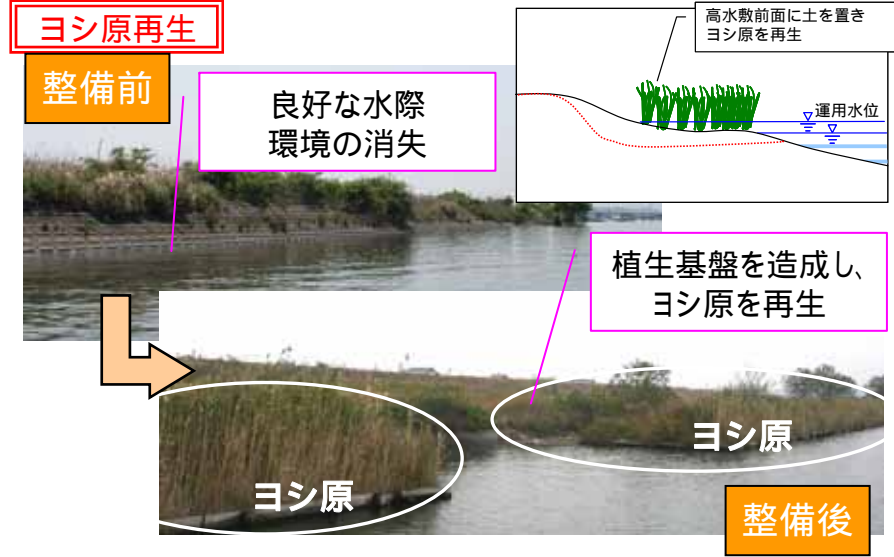


< 対策 >

- 下流域における多様な生態系の保全・再生を図るため、再生箇所の縦断的な連続性にも配慮し、生態系の基盤環境である「干潟・ヨシ原」の再生を行う。

整備内容

- 干潟の再生（延長 10,450m）
- ヨシ原の再生（延長 6,500m）

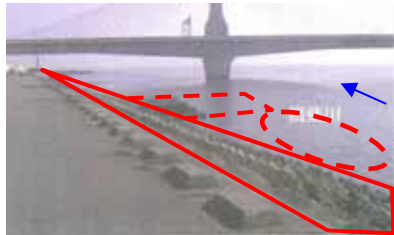


事業の投資効果

- ・干潟、ヨシ原の再生箇所では生物が増加傾向にあり、下流域における多様な生態系の保全、再生が期待される。
- ・自然観察や環境教育など地域活動の場としても活用されている。

整備前

例：揖斐川左岸（浦安地区）平成15年



・コンクリート護岸だけの水際は、生物にとっての生息・生育の場としての機能は低い。

干潟のない水際環境（コンクリート護岸）

例：長良川右岸（築戸地区）平成19年



・ヨシ原が減少し、ヨシ原に依存する生物の生息・生育の場が限られていた。

ヨシ原のない水際環境

整備後

例：揖斐川左岸（浦安地区）平成18年



水制工を設置すると共に、養浜を行い、自然の流水作用により緩やかな干潟を形成

基盤環境が再生され、干潟に依存する生物の生息環境が回復する。

再生された干潟

例：長良川右岸（築戸地区）平成22年



護岸前面にヨシの生育可能な場所をつくり、ヨシ原の再生を実施

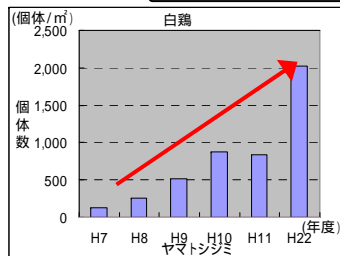
基盤環境が再生され、ヨシ原に依存する生物の生息環境が回復する。

再生されたヨシ原

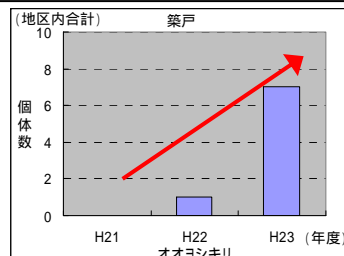
干潟・ヨシ原再生

整備による効果

干潟・ヨシ原の再生事業箇所では、確認される生物は増加傾向にあり、基盤環境の回復が期待される。



干潟再生箇所の調査結果（H6渚プラン）



ヨシ原再生箇所の調査結果

副次的な効果

再生箇所での、自然観察会、ヨシ植え体験会など、地域活動の場としても活用されている。



自然観察会



ヨシ植え体験

3. 費用対効果分析

再評価

木曽川総合水系環境整備事業(再評価)

事業全体に要する総費用(C)は133億円、総便益(B)は524億円、費用対便益比(B/C)は3.9となる。

	木曽川					長良川	揖斐川	木曽川・長良川・ 揖斐川	備考	
	水辺整備		自然再生							
	美濃加茂	一宮北部	南派川	笠松トンボ池	東加賀野井	忠節等	杭瀬川	木曽三川下流部		
評価時点	平成23年度									
整備期間	H23~27年度 (H22~28年度)	H21~23年度 (H20~24年度)	H24~28年度	H17~24年度	H16~28年度	H18~28年度	H23~27年度	H12~28年度	()内は事業全体の実施期間	
評価対象期間	整備期間+50年間									
受益範囲	5k	5k	6k	2.5k	3k	2.5k	4k	10k		
アンケート	WEBアンケート 配:1,724票 回:193票 (11.2%) 有効:135票 (69.9%) 世帯:49,572世帯	WEBアンケート 配:1,893票 回:238票 (12.6%) 有効:160票 (67.2%) 世帯:158,650世帯	WEBアンケート 配:1,893票 回:362票 (19.1%) 有効:238票 (65.7%) 世帯:231,913世帯	WEBアンケート、郵送 (電話帳より抽出) 配:1,371票 回:506票 (36.9%) 有効:315票 (62.3%) 世帯:14,653世帯	WEBアンケート 配:2,419票 回:360票 (14.9%) 有効:230票 (63.9%) 世帯:74,637世帯	WEBアンケート 配:1,724票 回:357票 (20.7%) 有効:255票 (71.4%) 世帯:74,878世帯	WEBアンケート 配:1,724票 回:208票 (12.1%) 有効:149票 (71.6%) 世帯:55,923世帯	WEBアンケート 配:2,572票 回:850票 (33.0%) 有効:481票 (56.6%) 世帯:241,918世帯	配:配布数 回:回収数(回収率) 有効:有効回答数(有効回答率) 世帯:受益世帯数	
支払意思額 (円/月・世帯)	210	211	223	153	231	336	233	310		
事業費 (百万円)	989	1,042	794	240	1,358	1,047	278	6,254		
維持管理費 (百万円)	92	354	48	5.0	60	33	40	79	必要額の積み上げ (現在価値化)	
総費用(C) (億円)	10	14	7.5	2.6	14	11	2.9	69	割引率4%で現在価値化	
年便益 (百万円/年)	125	402	621	27	207	302	156	900	WTP×世帯数×12ヶ月	
残存価値 (百万円)	5.3	7.2	0	0	0	0	0	0	割引率4%で現在価値化	
総便益(B) (億円)	22	83	110	5.6	37	53	29	220	割引率4%で現在価値化	
B/C(事業毎)	2.2	5.9	14.7	2.2	2.6	4.8	10.0	3.2		
B/C(分野毎)	4.4		3.9							総便益(便益+残存価値) 総費用(事業費+維持管理費)
B/C(水系)	3.9									

(感度分析)

		木曽川					長良川	揖斐川	木曽川・長良川・揖斐川		備考
		水辺整備		自然再生							
		美濃加茂	一宮北部	南派川	笠松トンボ池	東加賀野井	忠節等	杭瀬川	木曽三川下流部		
箇所別 B / C	全体事業 (B / C)	事業費 (+10% ~ -10%)	2.0 ~ 2.4	5.9 ~ 5.9	13.3 ~ 16.2	2.2 ~ 2.2	2.5 ~ 2.6	4.4 ~ 4.8	9.1 ~ 10.7	3.1 ~ 3.3	
		受益世帯数 (+10% ~ -10%)	2.0 ~ 2.4	5.4 ~ 6.5	13.2 ~ 16.1	1.9 ~ 2.3	2.4 ~ 2.9	4.4 ~ 5.4	9.0 ~ 11.0	2.9 ~ 3.5	
		工期 (+10% ~ -10%)	2.1 ~ 2.3	5.9 ~ 5.9	14.2 ~ 14.8	2.2 ~ 2.2	2.5 ~ 2.7	4.6 ~ 4.6	10.0 ~ 10.0	3.1 ~ 3.2	
	残事業 (B / C)	事業費 (+10% ~ -10%)	2.4 ~ 2.9	20.2 ~ 20.8	13.3 ~ 16.2	2.0 ~ 2.5	2.5 ~ 3.0	4.9 ~ 5.8	9.0 ~ 10.8	2.8 ~ 3.5	
		受益世帯数 (+10% ~ -10%)	2.4 ~ 2.9	18.8 ~ 22.8	13.2 ~ 16.1	1.8 ~ 2.2	2.5 ~ 3.0	4.7 ~ 5.6	8.9 ~ 10.7	2.8 ~ 3.4	
		工期 (+10% ~ -10%)	2.6 ~ 2.7	20.8 ~ 20.8	14.2 ~ 14.8	2.0 ~ 2.0	2.7 ~ 2.7	5.2 ~ 5.3	10.0 ~ 10.0	3.0 ~ 3.1	
水系 B / C	全体事業 (B / C)	事業費 (+10% ~ -10%)	3.8 ~ 4.1								
		受益世帯数 (+10% ~ -10%)	3.5 ~ 4.3								
		工期 (+10% ~ -10%)	3.9 ~ 4.0								
	残事業 (B / C)	事業費 (+10% ~ -10%)	5.6 ~ 6.7								
		受益世帯数 (+10% ~ -10%)	5.5 ~ 6.7								
		工期 (+10% ~ -10%)	6.1 ~ 6.1								

(前回評価との比較)

事 項		木曽川総合水系環境整備事業	
		前回評価	
		H20 木曽川水系河川整備計画報告時	
事業諸元		木曽川河川利用推進事業 1式 木曽川自然再生事業 1式	
計算条件	評価時点	平成20年度	
	整備期間	平成12年度～平成49年度	
	評価対象期間	整備期間+50年間	
	受益範囲	水辺整備 : 事業箇所から5km 世帯数 : 351,713世帯 自然再生 : 事業箇所から10km 世帯数 : 778,965世帯	
	年便益算出方法	CVM 簡便法に記載されている一般的な値 ・利用推進 2,400円/年・世帯 (200円/月・世帯) ・自然再生 3,100円/年・世帯 (258円/月・世帯)	
	支払い意思額(WTP)	・利用推進 : 2,400 円/年・世帯 (200 円/月・世帯) ・自然再生 : 3,100 円/年・世帯 (258 円/月・世帯)	
B/Cの算出	総事業費	257 億円	
	維持管理費	6.6 億円(現在価値)	
	総費用(C)	211 億円(現在価値)	
	年便益	・利用推進 : 8.44 億円/年 ・自然再生 : 24.1 億円/年	
	残存価値	-	
	総便益(B)	481 億円(現在価値)	
	B/C	2.3	

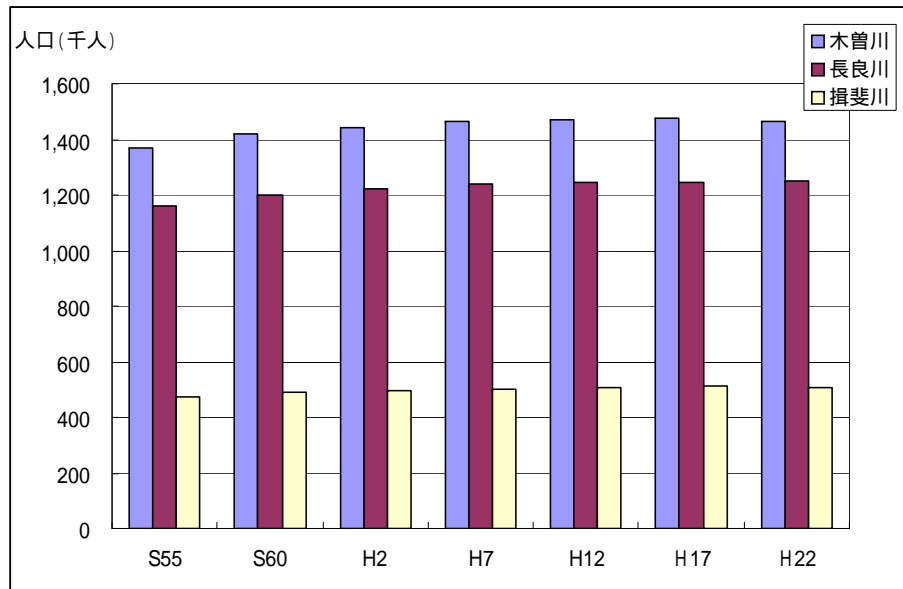
木曽川総合水系環境整備事業		
今回評価		備 考
H23 評価時 (完了箇所「事後評価に準ずるフォローアップ」を除く)		
木曽川水辺整備事業 1式 木曽川自然再生事業 1式		評価対象事業の変更 美濃加茂水辺整備事業 一宮北部水辺整備事業 南派川自然再生事業 笠松トンボ池自然再生事業 東加賀野井自然再生事業 忠節等自然再生事業 杭瀬川自然再生事業 木曽三川下流部自然再生事業
平成23年度		評価年次の変更
平成12年度～平成28年		評価対象事業見直しによる変更
整備期間+50年間		
水辺整備 : 事業箇所から5km圏 世帯数 : 208,222世帯 自然再生 : 事業箇所から2.5～10km圏 世帯数 : 622,941世帯		アンケート調査により見直し
CVM インターネットによるアンケート調査 配布数 : 1,371～2,572票(計15,320票) 回収数 : 193～850票(計3,074票) 回収率 : 11.2～36.9%(全体20.1%) 有効回答率 : 56.6～71.6%(全体63.9%)		
・水辺整備 : 210 ～ 211 円/月・世帯 ・自然再生 : 153 ～ 336 円/月・世帯		
120 億円		評価対象事業見直しによる変更 改修費、自治体費用を加算
7.1 億円(現在価値)		総事業費の0.5%から、必要額の積上げに変更
133 億円(現在価値)		評価対象事業見直しによる変更
・水辺整備 : 5.3 億円/年 ・自然再生 : 20.1 億円/年		アンケート調査結果により算出
0.13 億円(現在価値)		水辺整備事業について計上
524 億円(現在価値)		アンケート調査結果により算出
3.9		$\frac{\text{総便益(便益+残存価値)}}{\text{総費用(事業費+維持管理費)}}$

4. 評価の視点

(1) 事業の必要性等に関する視点

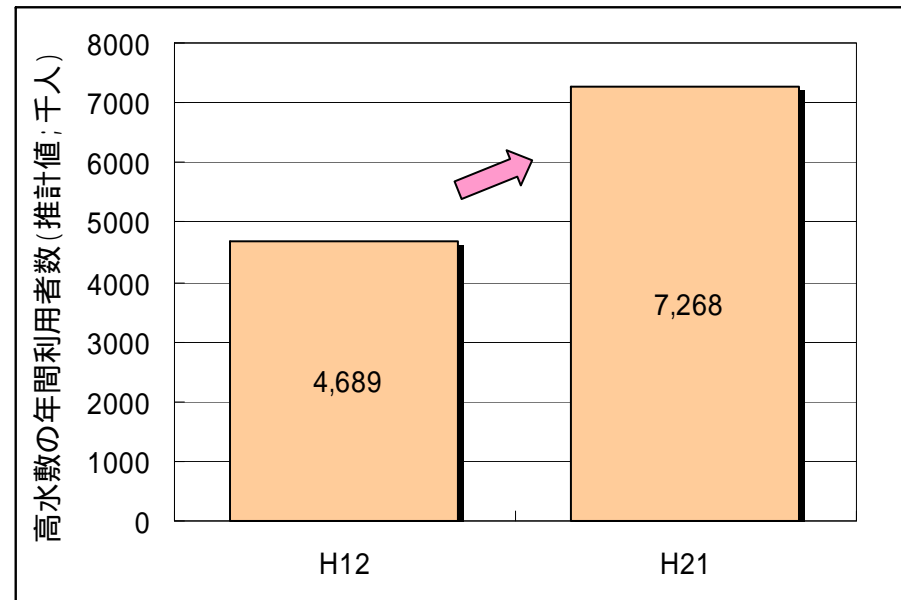
1) 事業を巡る社会経済情勢等の変化

- 沿川市町村人口は木曽川146万人、長良川125万人、揖斐川51万人であり、近年は横這い傾向である。
- 木曽三川の利用者数は、高水敷の利用者数は増加傾向にあり、河川空間に対する利用ニーズが増大していることが伺える。



沿川市町村人口の変遷

出典：国勢調査（H22年10月時点に木曽三川上流流域内に含まれる市町村を対象として集計）



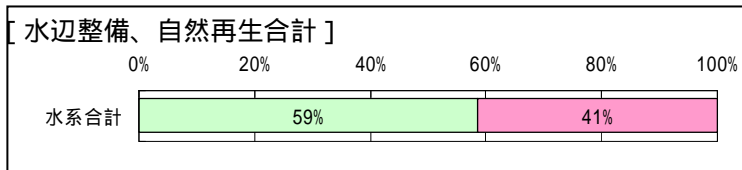
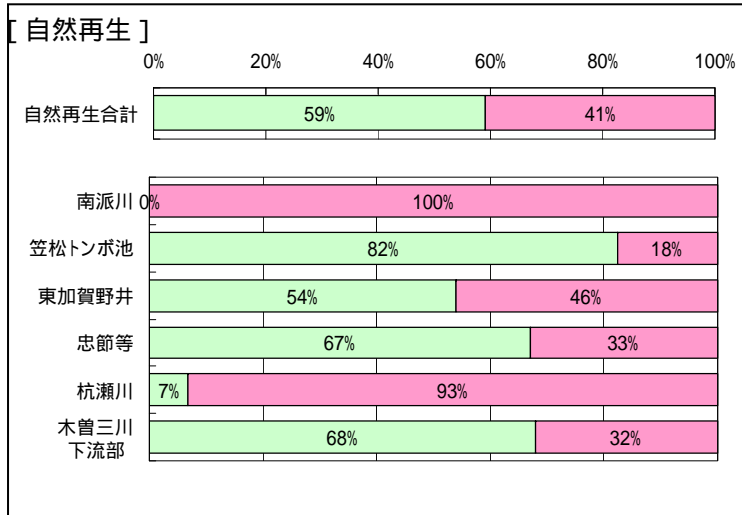
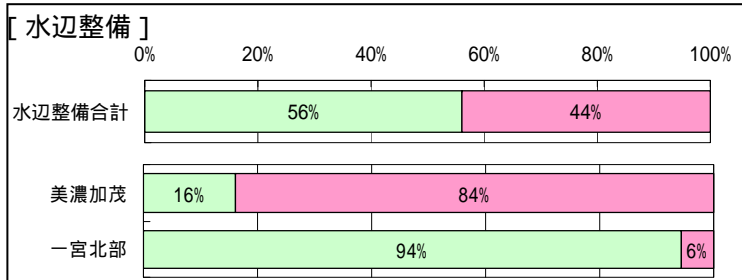
木曽三川の高水敷利用者数の推移

出典：河川水辺の国勢調査 利用実態調査

2) 事業の進捗状況

全体事業費：12,003百万円
 実施済み：7,036百万円
 残事業費：4,967百万円

完了分 残事業分



事業の進捗状況
 (事業費ベース；H23年度末時点)



残施工量

箇所	整備内容	残施工量
美濃加茂	親水護岸	850m
	高水敷	140千m ²
南派川	掘削	33千m ³
	樹木伐開	777千m ²
笠松	掘削	1千m ³
	樹木伐開	3千m ²
東加賀野井	底泥除去・盤下げ	5千m ³
	樹木伐開	13.9千m ²
忠節	掘削	53.7千m ³
杭瀬川	掘削	28.4千m ³
	樹木伐開	27千m ²
木曾三川下流	ヨシ原再生	2,950m
	干潟再生	4,500m

— 水辺整備事業
 — 自然再生事業

再評価対象事業の実施箇所

(2) 事業の進捗の見込みの視点

地域と連携した取り組みにより、関係者と合意形成を図りながら進めていることから、事業の実施にあたっての支障はない。

- ・ 市民会議（ガヤガヤ会議）による住民からの意見聴取の実施。（美濃加茂川まちづくりガヤガヤ会議）
- ・ 各種検討会による市民、行政、学識経験者が協働した対策の実施。（トンボ池等湿地再生検討会など）
- ・ 地域と一体となった環境保全活動の実施。（イタセンパラ保護協議会、トンボ池を守る会など）



美濃加茂川まちづくりガヤガヤ会議



トンボ池湿地再生検討会（第1回検討会）



イタセンパラ保護協議会 啓発活動



トンボ池を守る会の活動状況

(3) コスト縮減や代替案立案等の可能性の視点

- ・ 水辺整備事業：散策路整備にあたり、既存発生品を再利用することなどにより、コスト縮減を図る。
- ・ 自然再生事業：干潟再生の養浜材料として、建設発生土（河道浚渫土）を活用してコスト縮減を図る。



連節ブロックの発生品の再利用(橋脚防護工)



路盤材の採取土利用

既存発生品の再利用などによるコスト縮減（一宮北部水辺整備）



浚渫船による作業



作業船による運搬



再生干潟に投入

河道浚渫土の活用によるコスト縮減（木曾三川下流部自然再生）

5 . 県への意見聴取結果

(岐阜県)

- ・事業費については、最新技術の活用も含めて、徹底したコスト縮減に努められたい。
- ・事業目的が、「清流の国ぎふ」づくりの政策の一つである「自然と共生した川をつくる」に沿うものであることから、引き続き進めていただきたい。

(愛知県)

- 1 「対応方針（原案）」案に対して異議はありません。
- 2 事業実施にあたっては、事業効果を検証しつつ、順応的な管理を行っていただくようお願いしたい。
- 3 なお、事業実施にあたっては、一層のコスト縮減など、より効率的な事業推進に努められるようお願いしたい。

(三重県)

本事業は都市部における貴重な自然環境の保全のために必要な事業です。今後も引き続き、本県と十分な調整をしていただき、効率的な事業執行により、更なるコスト縮減をお願いします。

6 . 対応方針（原案）

- ・木曽三川らしい河川環境の保全・再生や、地域住民の河川利用に関する需要が見込まれ、事業の必要性は高い。
- ・今後、効果の発現が見込めることから、木曽川総合水系環境整備事業を継続する。

7. 事後評価に準ずるフォローアップ (1) 計画内容と事業の効果

フォローアップ

太田河道整備

整備の必要性

<背景>

- ・平成6年の洪水時に、木曾川の河底から全国的にも珍しい樹木の化石（化石林）が発見された。
- ・美濃加茂市により、化石林の保護・公開に向け公園整備を行うことが予定された。

<課題>

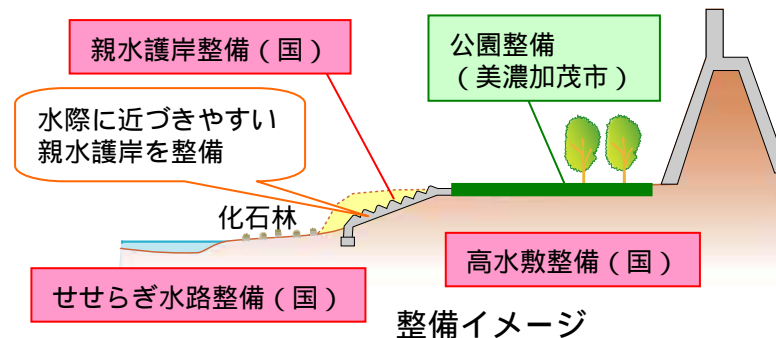
- ・当該地区は高水敷や護岸が未整備であったため、化石林が発見されたにも関わらず安全な利活用が妨げられていた。

<対策>

- ・安全に水辺へ近づき環境学習の場として活用できるよう、親水護岸、高水敷整備等を実施した。
- ・基盤整備後、美濃加茂市が公園整備を実施した。

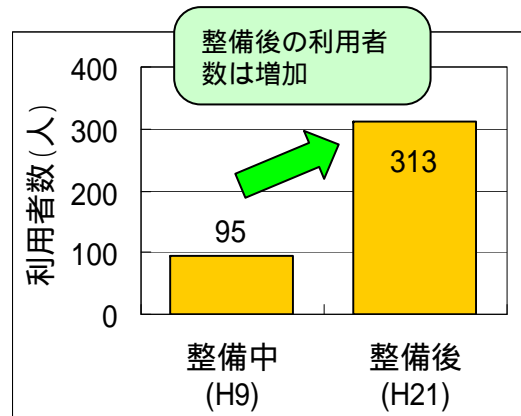
整備内容

- ・親水護岸整備(延長300m) (国)
- ・高水敷整備(23千㎡) (国)
- ・せせらぎ水路整備(延長250m) (国)
- ・公園整備(美濃加茂市)



事業の効果

- ・親水護岸やせせらぎ水路を整備したことにより、環境教育やイベントなど、水辺に親しめる空間として活用されるようになった。



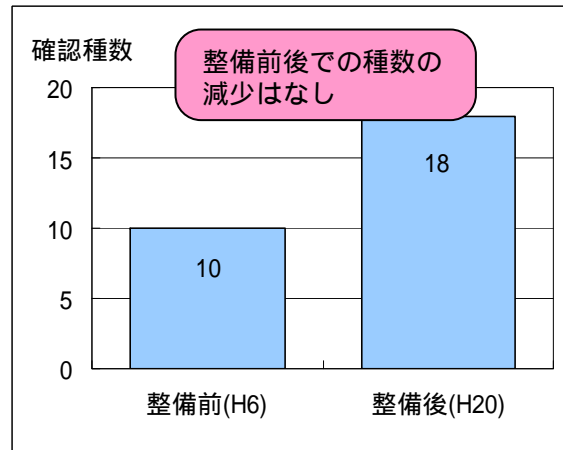
化石林公園周辺の利用者数の変化

(出典：河川水辺の国勢調査 利用実態調査)
年7日間の調査日における利用者数の合計値



イベントでの利用

環境の変化



魚類確認種数の変化(中濃大橋～太田橋間)

(出典：河川水辺の国勢調査)



環境教育の利用(化石林の観察)



子供たちの環境教育の場として利用されるようになった。

笠田水辺共生体験館整備

整備の必要性

< 背景 >

・河川及び湖沼の自然環境保全・復元のための基礎的・応用的研究や情報発信等を行うための様々な施設が建設されていた。

H10 自然共生研究センター完成

H11 河川環境楽園開園

H17.3 岐阜県河川環境研究所完成

H17.4 水辺共生体験館開館

H22 行政刷新会議の対象（会議の結果より、管理運営をNPO等に移行）

H23 NPOによる管理を実施

< 課題 >

・河川における自然再生を円滑に実施するため、河川管理者、生物・工学に関する専門家、NPOや地域に生活する人々が、共通の認識を持ち活動する場が設けられていなかった。

< 対策 >

・川の仕組みや川と共生するための技術を、子どもたちや市民が実際に体験し、実験しながら学べるような施設整備を実施した。



水辺共生体験館

整備内容

・水辺共生体験館の整備



川の仕組みや川と共生するための技術を、子どもたちや市民が実際に体験し、実験しながら学べるような様々な施設を備えている。



中流エリア



木曾三川情報交流スクエア

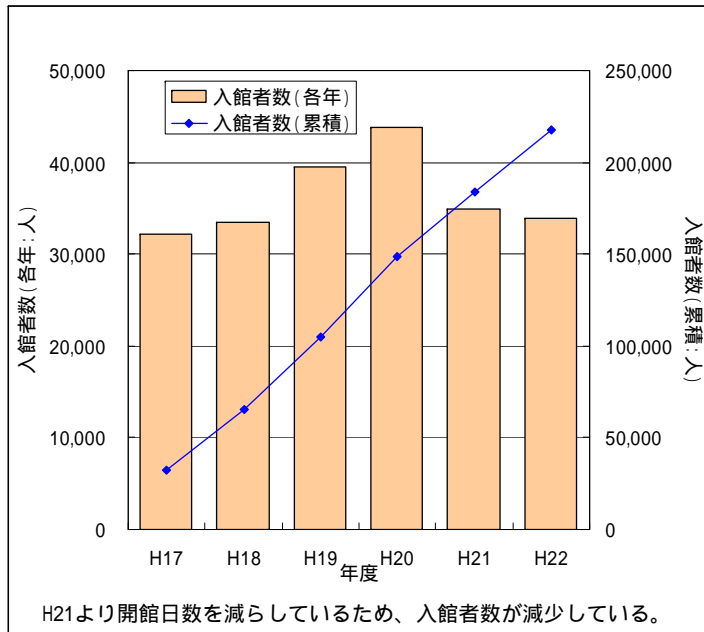


上流エリア

事業の効果

- 川の仕組みや川と共生するための技術を、子どもたちや市民が実際に体験し、実験しながら学べるような様々な施設が整備され、環境教育やイベントなどとして県内外から多くの人に活用されるようになった。

水辺共生体験館への入館者数



水辺共生体験館への入館者数の推移

- 毎年3～4万人の人が利用
- 開館以降の利用者数は20万人に達する
- 来訪者は岐阜県内だけでなく、隣県の愛知県や滋賀県の小中学校、NPOなどに及ぶ。

イベント、活動内容



河川環境学習
(平成20年1月)



夏休み自然型イベント
「川の学校」
(平成20年8月)



河川生態と川の生物学習
(平成20年7月)



川はともだちエコツアー
(平成22年6月)

江南水辺整備

整備の必要性

<背景>

- ・当該地区は、江南市の地域整備構想として第4次江南市総合計画などに位置づけられ、平成16年には地域再生計画に認定された。
- ・「御囲堤」などの治水に関わる歴史的建造物が今もなお残され、また、「すいとぴあ江南」「フラワーパーク江南」といった施設が整備されるなど、川を活かしたまちづくりが進められていた。

<課題>

- ・歴史・文化史跡や上下流の公園との連続性が確保されておらず、水辺にも近づきにくいなど安全な利活用が妨げられていた。

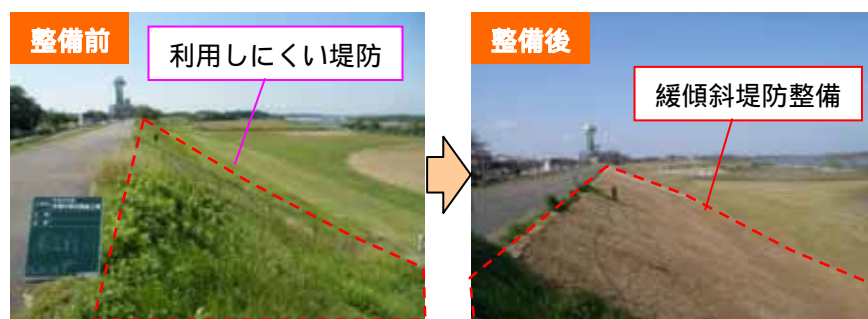
<対策>

- ・水辺へのアクセスや利用の安全性を確保するため、親水護岸、高水敷整備、緩傾斜堤防整備等を実施した。
- ・基盤整備後、江南市が散策路の整備を実施した。

親水護岸



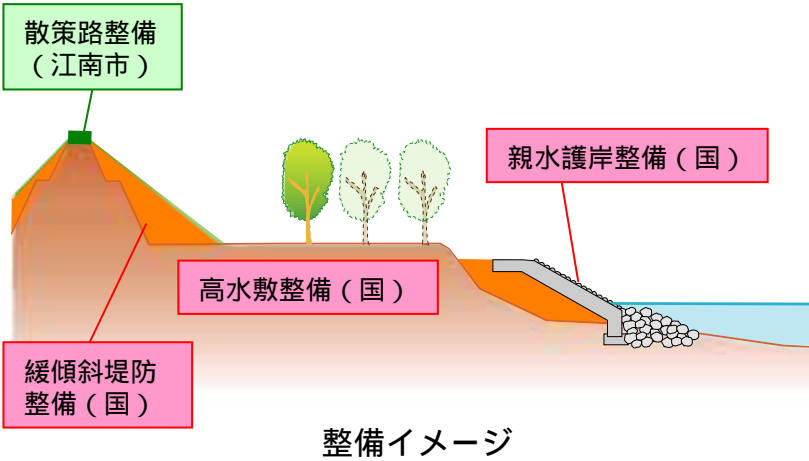
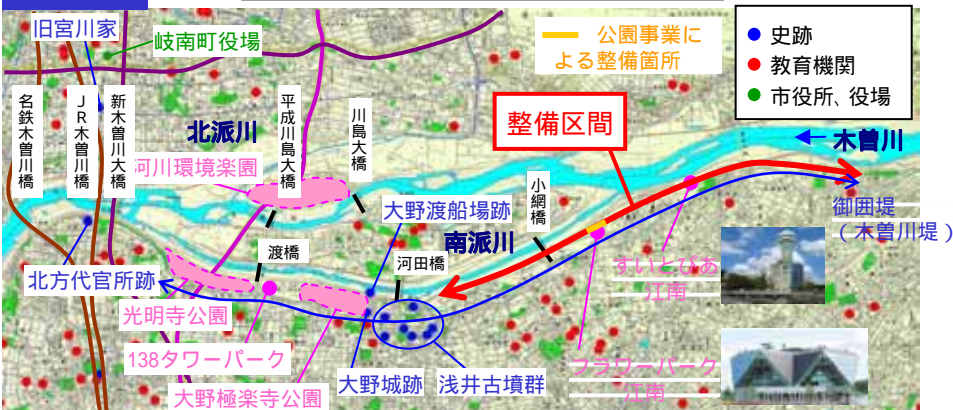
緩傾斜堤防



整備内容

- ・親水護岸整備(延長330m)(国)
- ・高水敷整備(4,500m)(国)
- ・緩傾斜堤防整備(延長600m)(国)
- ・散策路整備(江南市)

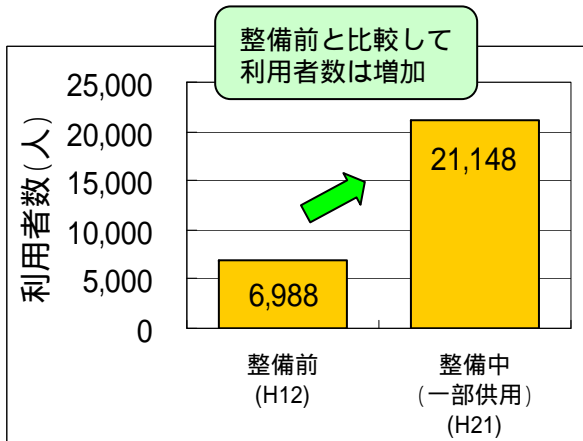
整備箇所



整備イメージ

事業の効果

- ・緩傾斜堤防や親水護岸を整備したことにより、安全に近づけるようになり、スポーツやイベントの場など、水辺に親しむ空間として活用されるようになった。
- ・散策路、サイクリングロードを整備し、サイクリングやジョギングなどの場として利用されるようになった。



江南地区周辺の利用者数の変化

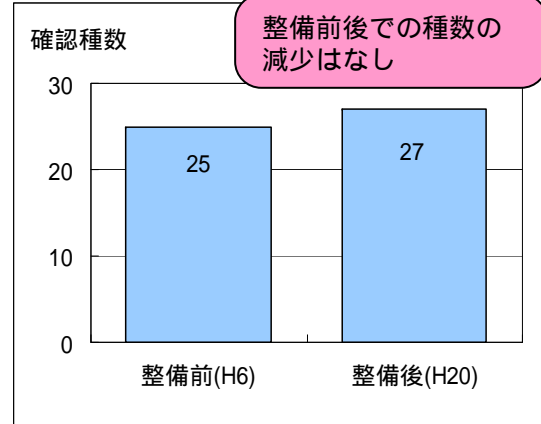
(出典：河川水辺の国勢調査 利用実態調査)
年7日間の調査日における利用者数の合計値



高水敷の利用

堤防と河川敷の広場が一体となった利用が
されるようになった。

環境の変化



魚類確認種数の変化
(愛岐大橋付近)



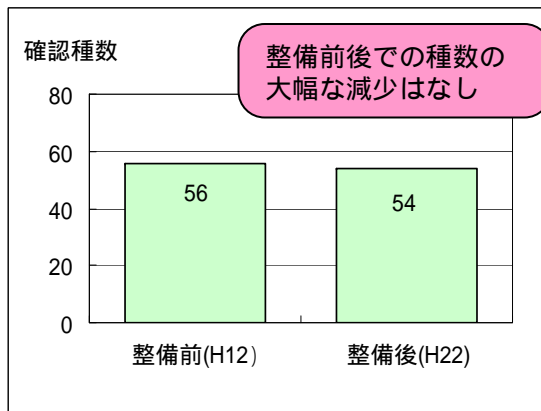
サイクリングの利用

サイクリング・ジョギング等の場として利
用されるようになった。



高水敷のスポーツ利用

高水敷でのスポーツの場として利用される
ようになった。



鳥類確認種数の変化
(愛岐大橋付近)

(出典：河川水辺の国勢調査)

一宮水辺整備

整備の必要性

<背景>

- ・河川空間の利用が高い（濃尾大花火など）地域であり、「川、既存施設、まちを結ぶネットワーク」を形成することにより、さらなる利用促進、ワンド等の自然環境の体験、治水の歴史学習など川を軸とした生活空間と河川空間の一体的な街作りが進められていた。

<課題>

- ・歴史・文化史跡や上下流の公園との連続性が確保されておらず、水辺にも近づきにくいなど安全な利活用が妨げられていた。

<対策>

- ・水辺へのアクセスや利用の安全性を確保するため、親水護岸、高水敷整備を実施した。
- ・基盤整備後、一宮市が散策路の整備を実施した。

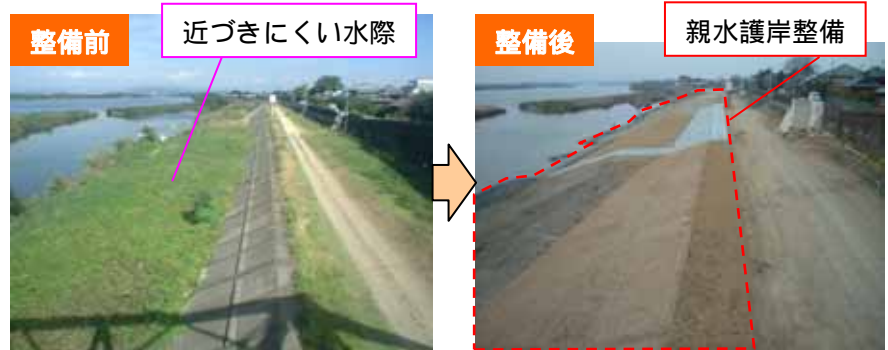
整備内容

- ・親水護岸整備(延長981m)（国）
- ・高水敷整備（800m）（国）
- ・散策路整備（一宮市）

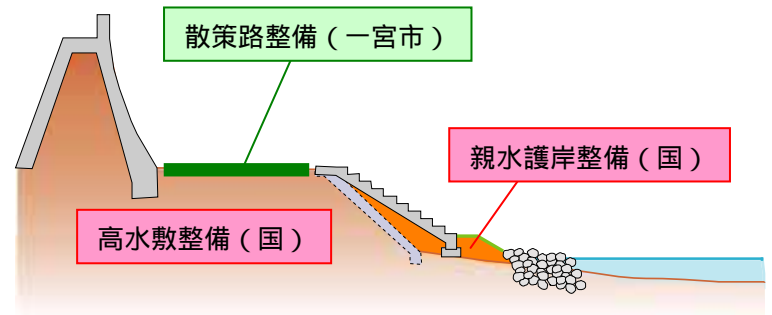


- 史跡
- 教育機関
- 市役所、役場

親水護岸



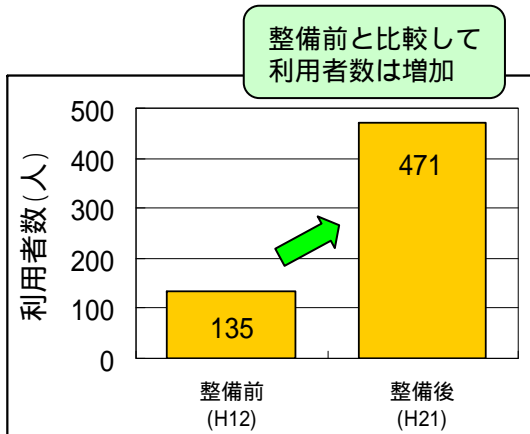
散策路



整備イメージ

事業の効果

- ・親水護岸や高水敷を整備したことにより、安全に近づけるようになり、イベントの場など水辺に親しむ空間として活用されるようになった。
- ・散策路、サイクリングロードを整備し、サイクリングやジョギングなどの場として利用されるようになった。



一宮地区周辺の利用者数の変化

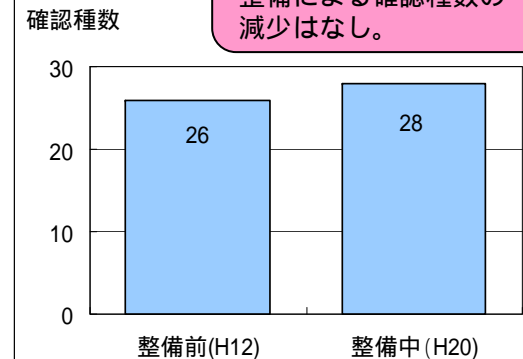
(出典：河川水辺の国勢調査 利用実態調査)
年7日間の調査日における利用者数の合計値



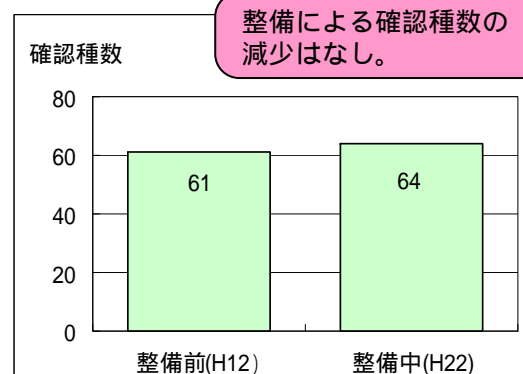
散策路の利用

サイクリング・ジョギングなどの場として
利用されるようになった。

環境の変化



魚類確認種数の変化
(濃尾大橋付近)



鳥類確認種数の変化
(濃尾大橋～尾濃大橋)

(出典：河川水辺の国勢調査)



イベント利用(濃尾大花火)

イベントの場として利用されるようになった。



加茂自然再生

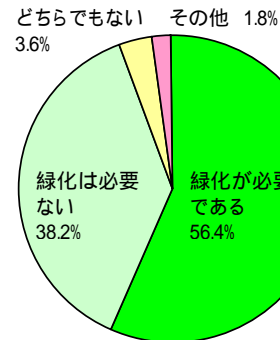
整備の必要性

< 背景 >

- ・ 飛騨木曽川国定公園、名勝木曽川に指定された急流の断崖と奇岩がくりなす木曽川の景観が地域資源となっており、「日本ライン下り」が行われている。
- ・ 昭和58年美濃加茂災害の激特事業により特殊堤が整備され、昭和63年に完成した。
- ・ 河川環境管理基本計画では、拠点地区整備計画として日本ライン地区に指定されており、木曽川の渓流と渓谷美との出会いの空間テーマにした整備保全を行うこととなっている。

< 課題 >

- ・ 特殊堤の整備により、観光資源としていた木曽川らしい景観が悪化した。



堤防緑化に対する住民意見
(平成13年現地アンケート調査結果より)

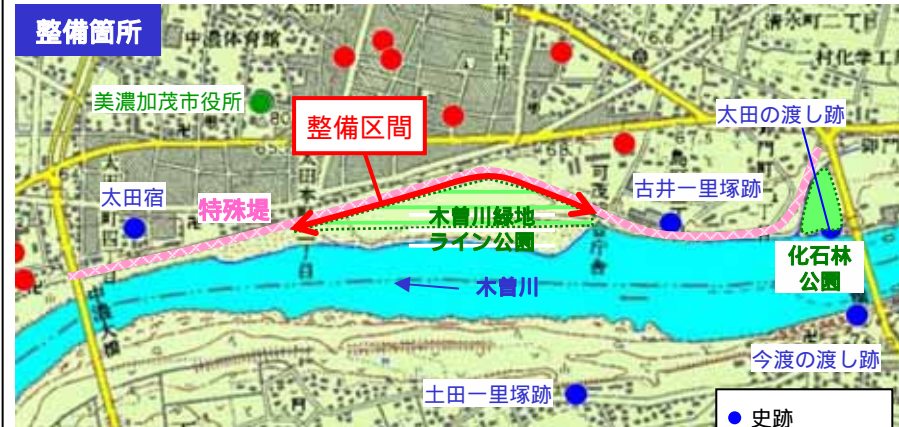
< 対策 >

- ・ 周辺景観と調和した景観形成を図るため、在来種を用い、特殊堤の緑化を実施した。

緑化に用いた植物
ヨモギ、イタドリ、ススキ、ヤマハギ、アキグミ、シャリンバイ、ネムノキ、ナツツタなど

整備内容

- ・ 特殊堤の堤防緑化 (延長640m)



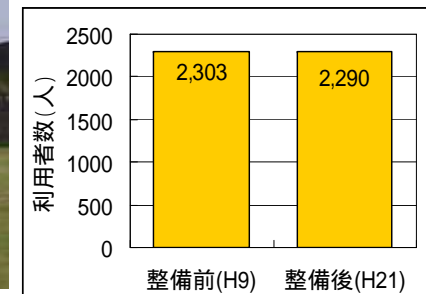
- 史跡
- 教育機関
- 市役所、役場

事業の効果

- ・コンクリートの特殊堤の緑化を行い、緑に覆われた和らいだ景観が形成されるようになった。



堤防緑化の状況



木曾川緑地ライン公園周辺の利用者数の変化

複数の緑化方法で堤防緑化を図ることにより、緑に覆われた緑地公園にふさわしい景観が形成された。

(出典：河川水辺の国勢調査 利用実態調査)
年7日間の調査日における利用者数の合計値

阿木川ダム水質保全事業

整備の必要性

< 背景 >

- ・阿木川ダムは、洪水調節、愛知県や岐阜県への利水補給及び流水の正常な機能の維持に対する補給を目的とした多目的ダムである。

< 課題 >

- ・阿木川ダム貯水池では、平成9年以降、アオコの発生が頻発するようになり、ダム下流で取水する水道水にも影響を与えかねない状況となった。

曝気循環設備導入前の状況



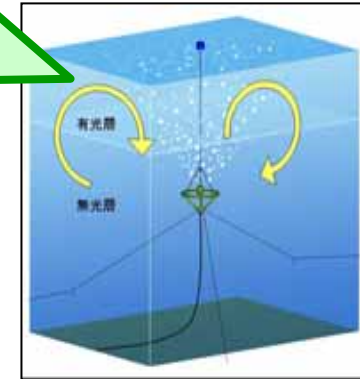
< 対策 >

- ・アオコ発生抑制を目的とした曝気循環設備を設置した。

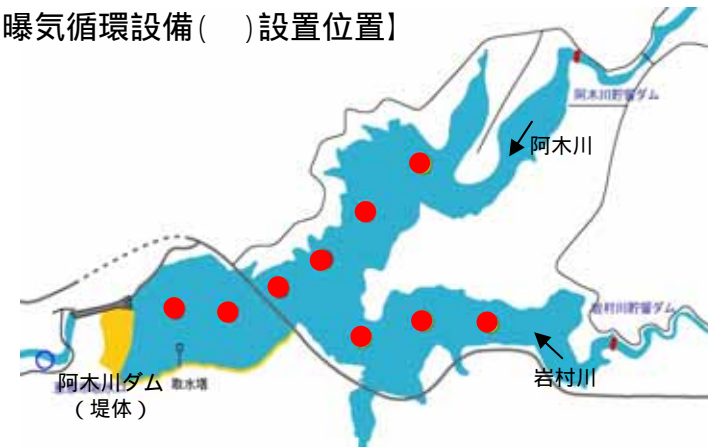
整備内容

曝気循環設備 9基設置

- ・空気の浮く力を利用して湖水を循環させ、表面に浮いているアオコ等を光の届かない深い層(無光層)まで移動させる。
- ・無光層まで送りこまれたアオコ等は、十分な光が得られないので生育しにくくなり、アオコ等の大量発生を抑えることができる。



【曝気循環設備()設置位置】



事業の効果

曝気循環設備導入前

・ダム湖全面でアオコが発生



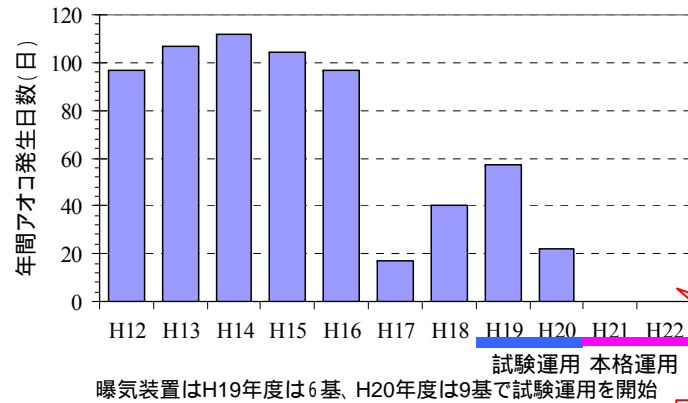
曝気循環設備稼働後

・本格稼働した平成21年以降、アオコは発生していない

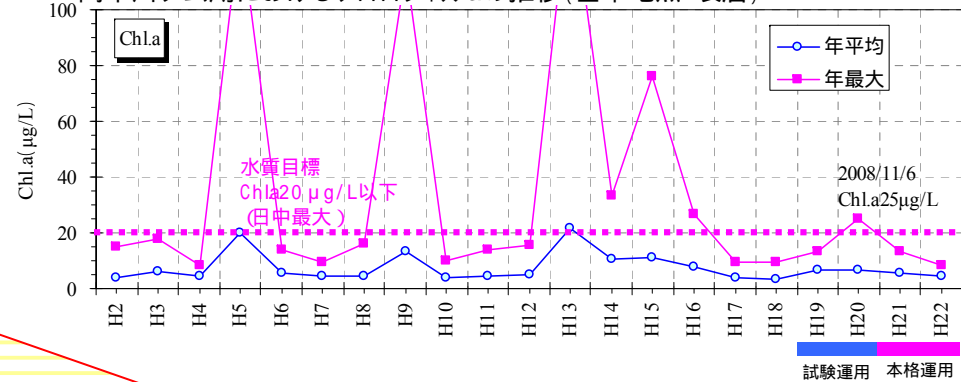


曝気循環設備稼働状況

過去10年間のアオコ発生日数の推移



阿木川ダム湖におけるクロロフィルaの推移(基準地点・表層)



本格運用後の平成21年以降、アオコは発生していない

犀川水辺整備

整備の必要性

<背景>

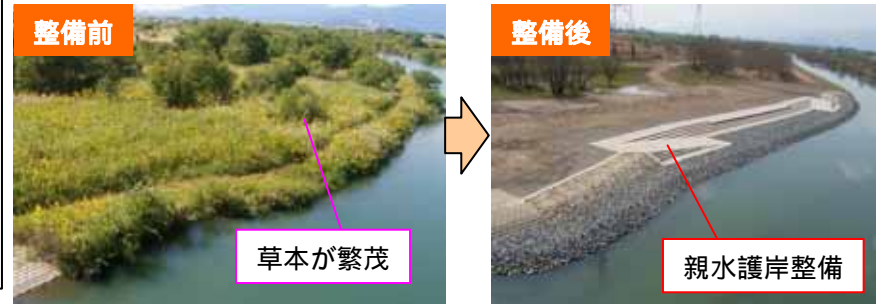
- ・当該地域は、かつては「輪中」により水害を防ぎ、また、河川を利用した物資運搬の要として繁栄した水との関わりの強い地域である。
- ・内水対策事業の一環として犀川遊水地事業が実施されている。

<課題>

- ・かつて生活の一部であった川とのつながりが希薄化していた。
- ・遊水地整備により、かつて有していた湿地地帯を形成していた自然環境が喪失した。

<対策>

- ・遊水地の一部を活用し、子どもたちが自然体験・環境学習の場として活用できるよう、親水護岸、ワンド、高水敷整備等を実施した。
- ・基盤整備後、瑞穂市及び大垣市（旧墨俣町）が遊歩道等の整備を実施した。

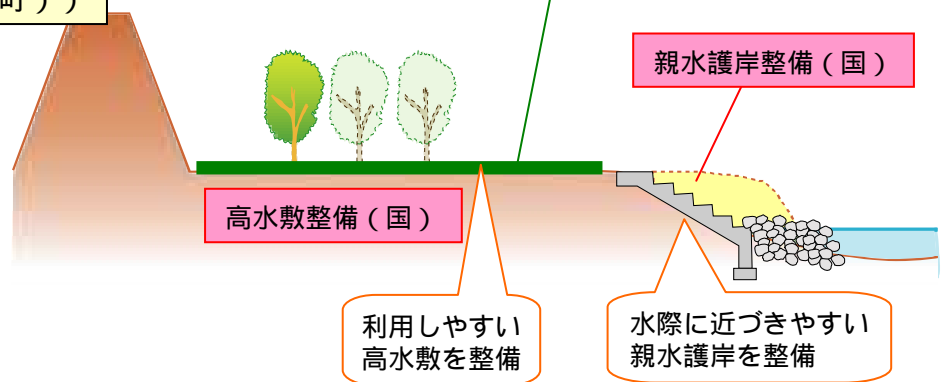


整備内容

- ・親水護岸整備（延長782m）（国）
- ・ワンド整備（一式）（国）
- ・高水敷整備（71千㎡）（国）
- ・遊歩道等の整備（瑞穂市、大垣市（旧墨俣町））



多目的広場、安全に近づける小川、遊歩道の整備（瑞穂市、大垣市（旧墨俣町））



整備イメージ

事業の効果

- ・親水護岸や高水敷を整備したことにより、自然観察（野鳥観察は毎月実施）や環境教育、イベント（平成22年度は5回開催）など、水辺に親しむ空間として活用されるようになった



園路散策



植物観察会（平成22年10月）

自然観察や環境教育などの場として利用されるようになった。



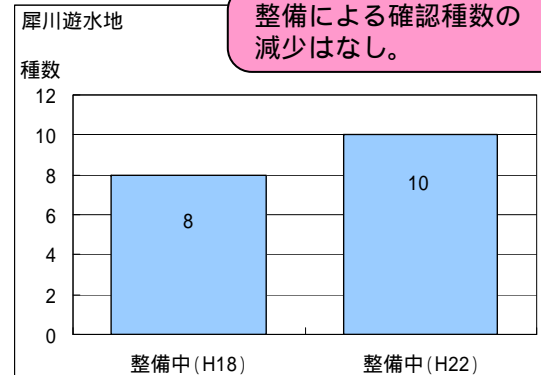
魚類調査



いかだ競争の実施状況（平成22年8月）

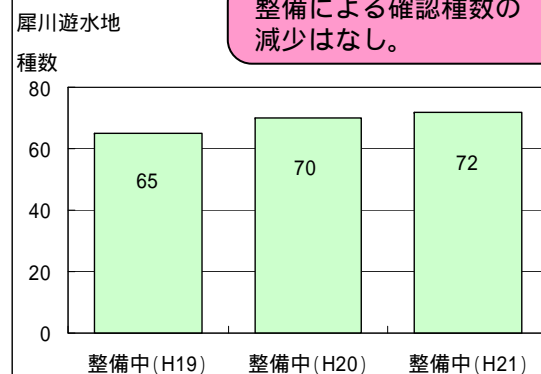
いかだ競争などのイベントの場として利用されるようになった。

環境の変化



魚類確認種数の変化

（出典：犀川子供の水辺協議会における調査結果）



鳥類確認種数の変化

（出典：犀川子供の水辺協議会における調査結果）

河川水辺の国勢調査は行われていない。

輪之内・幡長水辺整備

整備の必要性

<背景>

- ・古くから「輪中」が形成され水との関わりが深く、宝暦治水で薩摩藩士が難工事を極めて造った川の歴史的遺跡である大樽川洗堰が存在している。
- ・隣接して、道の駅「クレール平田」が開駅しており、連携した整備が必要であった。

<課題>

- ・河川敷には草や樹木が繁茂し、高水敷の利用や水際に近づくことが困難な状況であった。

<対策>

- ・子供たちが川とふれあうことができるよう、親水護岸、高水敷整備等を実施した。
- ・基盤整備後、輪之内町、旧平田町がグラウンド等の整備を実施した。



グラウンド等の整備
(輪之内町、旧平田町)



親水護岸整備(国)

整備内容

- ・親水護岸整備(延長1,458m)(国)
- ・高水敷整備(80千m²)(国)
- ・グラウンド等の整備(輪之内町、旧平田町)

整備箇所



グラウンド等の整備(輪之内町、旧平田町)

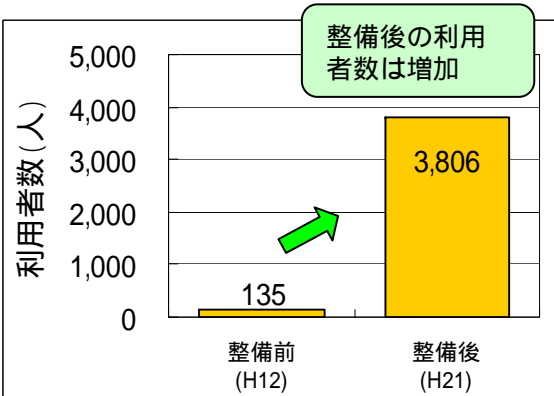
親水護岸整備(国)

高水敷整備(国)

整備イメージ

事業の効果

- ・親水護岸や高水敷を整備し、安全に近づけるようになり、スポーツや散策、子供たちが水辺に親しむ場として活用されるようになった。



輪之内・幡長地区周辺の利用者数の変化

(出典：河川水辺の国勢調査 利用実態調査)
年7日間の調査日における利用者数の合計値



園路の利用

園路は散策やサイクリングの場として利用されるようになった。



高水敷の利用

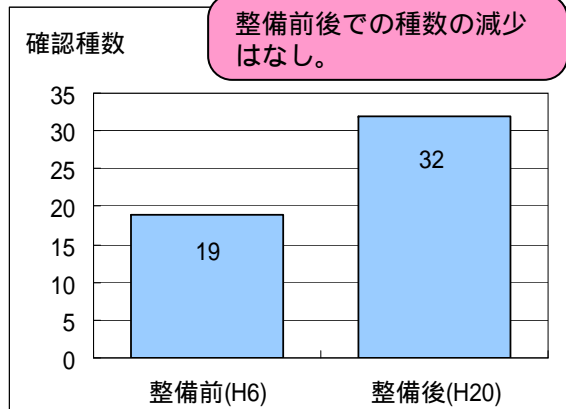
広い高水敷は、スポーツの場としての利用されるようになった。



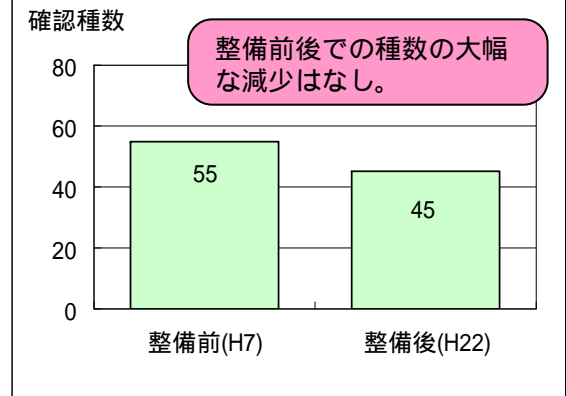
じゃぶじゃぶ池の利用 (出典：海津市HP)

子供たちが水辺に親しむ場として利用されるようになった。

環境の変化



魚類確認種数の変化
(大藪大橋付近)



鳥類確認種数の変化
(大藪大橋付近)

(出典：河川水辺の国勢調査)

公郷河道整備

整備の必要性

<背景>

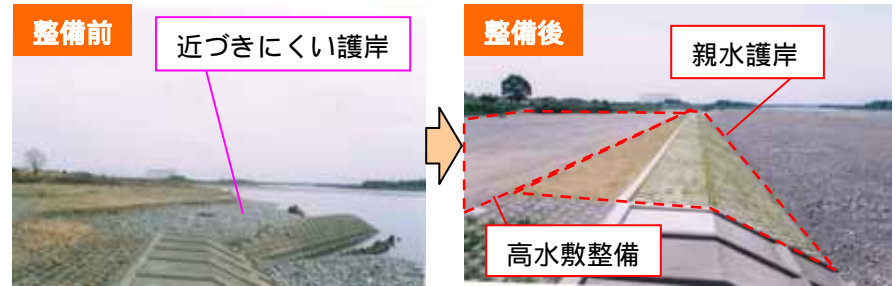
- ・広大な高水敷を有し、運動広場などが整備され、ひろく町民に親しまれている箇所である。
- ・根尾川、揖斐川の恵みである大地と豊かな自然環境帯を活用した「グリーンベルト構想」によるまちづくりを進めている。
- ・大野グライダークラブなどにより、グライダー滑空場としての利用も行われている。

<課題>

- ・護岸の未整備区間や樹林化により、安全な利活用が妨げられていた。

<対策>

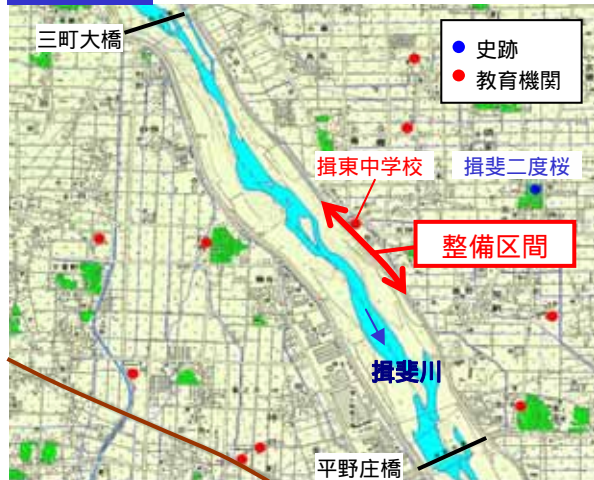
- ・親水性を考慮し、利用の安全性を確保するため、親水護岸、高水敷整備等を実施した。
- ・基盤整備後、大野町が公園整備を実施した。



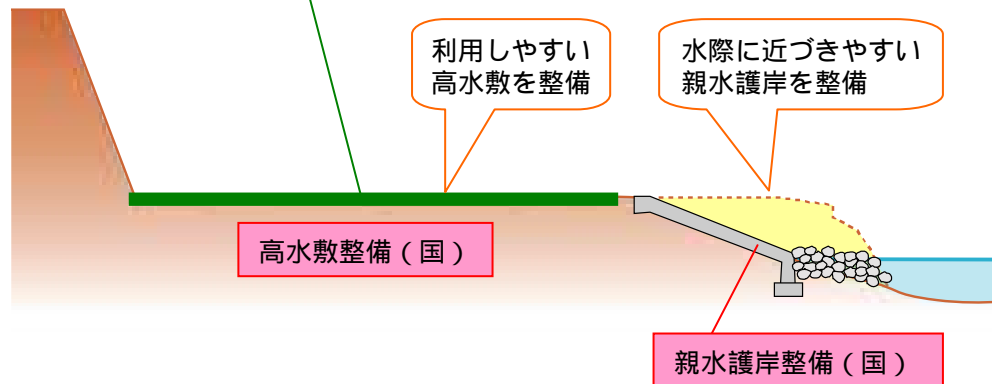
整備内容

- ・親水護岸整備（延長400m）（国）
- ・高水敷整備（80千m²）（国）
- ・スポーツの原っぱ等の整備（大野町）

整備箇所



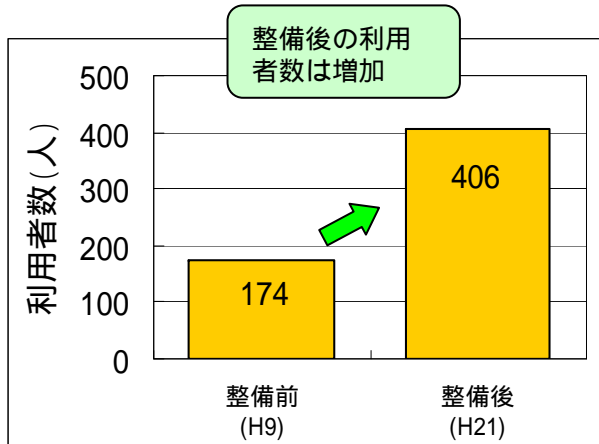
スポーツの原っぱ整備、
エントランス整備等（大野町）



整備イメージ

事業の効果

- ・ 親水護岸や高水敷を整備したことにより、グライダーの滑空場やスポーツ、環境教育の場として活用されるようになった。



公郷地区周辺の利用者数の変化

(出典：河川水辺の国勢調査 利用実態調査)
年7日間の調査日における利用者数の合計値



高水敷の利用(グライダー)



高水敷の利用(スポーツ)

広い高水敷は、イベントやスポーツの場としての利用されるようになった。



環境教育としての利用

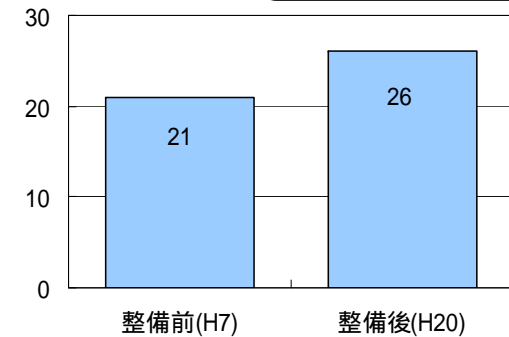


自然観察や環境教育の場としての利用が盛んに行われるようになった。

環境の変化

確認種数

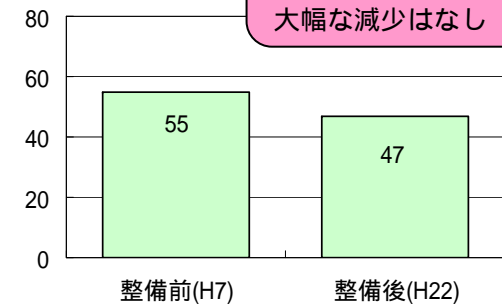
整備前後での種数の減少はなし



魚類確認種数の変化
(平野庄橋付近)

確認種数

整備前後での種数の大幅な減少はなし



鳥類確認種数の変化
(平野庄橋付近)

(出典：河川水辺の国勢調査)

(2) 費用対効果分析

フォローアップ

木曽川総合水系環境整備事業(事後評価に準ずるフォローアップ)

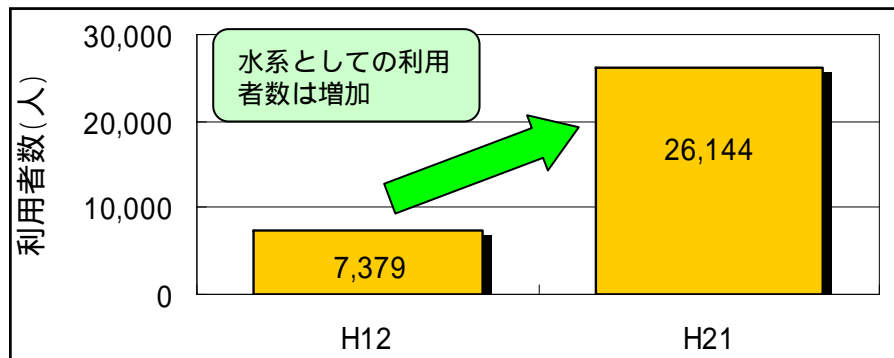
各箇所毎に見ると、総費用(C)は4.4～28億円、総便益(B)は14～79億円、費用対便益比(B/C)は1.7～5.7となる。

	木曽川					長良川		揖斐川		備考
	水辺整備				自然再生	水環境整備	水辺整備			
	太田	笠田水辺共生 体験館	江南	一宮	加茂	阿木川ダム	犀川	輪之内・幡長	公郷	
評価時点	平成23年度									
整備期間	H8～10年度 (H8～12年度)	H9～17年度 (H9～17年度)	H18～20年度 (H18～22年度)	H18～19年度 (H18～21年度)	H11～15年度	H17～20年度	H17～20年度 (H16～22年度)	H14～17年度 (H11～17年度)	H10～12年度 (H10～17年度)	()内は事業全体の実施期間
評価対象期間	整備期間+50年間									
計算条件	6k	5k	5k	4k	4k	8k	4k	7k	5k	
アンケート	WEBアンケート 配:1,884票 回:234票 (12.4%) 有効:144票 (61.5%) 世帯:53,296世帯	WEBアンケート、 配:1,761票 回:500票 (28.4%) 有効:330票 (66.0%) 世帯:78,008世帯	WEBアンケート 配:1,724票 回:288票 (16.7%) 有効:201票 (69.8%) 世帯:141,796世帯	WEBアンケート 配:2,419票 回:304票 (12.6%) 有効:198票 (65.1%) 世帯:56,039世帯	WEBアンケート 配:1,884票 回:150票 (8.0%) 有効:94票 (62.7%) 世帯:33,780世帯	アンケート 配:2,000票 回:639票 (32.0%) 有効:310票 (48.5%) 世帯:17,966世帯	WEBアンケート 配:1,724票 回:295票 (17.1%) 有効:201票 (68.1%) 世帯:30,142世帯	WEBアンケート 配:2,480票 回:251票 (10.1%) 有効:186票 (74.1%) 世帯:59,227世帯	WEBアンケート 配:2,149票 回:210票 (9.8%) 有効:138票 (65.7%) 世帯:24,662世帯	配:配布数 回:回収数(回収率) 有効:有効回答数(有効回答率) 世帯:受益世帯数
支払意思額 (円/月・世帯)	207	215	208	190	213	257	191	171	294	
B / C の算出										
事業費 (百万円)	531	1,744	1,009	539	293	530	771	1,228	471	
維持管理費 (百万円)	70	275	522	440	5.0	94	20	251	76	必要額の積み上げ (現在価値化)
総費用(C) (億円)	9.3	28	17	11	4.4	7.4	9.1	20	8.1	割引率4%で現在価値化
年便益 (百万円/年)	132	201	354	128	86	55	69	122	87	WTP×世帯数×12ヶ月
残存価値 (百万円)	7.1	14	8.5	4.4	0	12	6.9	13	5.2	割引率4%で現在価値化
総便益(B) (億円)	44	55	79	30	25	14	16	33	24	割引率4%で現在価値化
B/C	4.7	2.0	4.6	2.7	5.7	1.9	1.8	1.7	3.0	$\frac{\text{総便益(便益+残存価値)}}{\text{総費用(事業費+維持管理費)}}$

(3) 評価の視点

1) 社会経済情勢の変化

(1) 環境教育・自然体験などの場としての利用



事業実施地区の利用者数の変化

太田地区、江南地区、一宮地区、輪之内・幡長地区、公郷地区の利用者数の合計

(出典：河川水辺の国勢調査 利用実態調査)
年7日間の調査日における利用者数の合計値

公郷地区



水生生物調査に代表される環境教育の場として利用

太田地区



子供たちの環境教育や自然体験の場などとして利用

(2) NPO等の活動の広がり

犀川子供の水辺協議会



NPO法人 江南フラワーズ



NPOなどの団体により、自然観察、自然体験などの場として利用

(3) イベントなどの場としての利用

木曽川サイクリング(一宮、江南)



広い河川敷の空間や連続したサイクリングロード等は、イベントなどの場として利用

犀川



いかだ競争などのイベントが開催

一宮

一宮観光応援プロジェクトにおいて、渡し船への乗船など、木曽川を活用した観光ツアーを企画

2) 今後の事後評価の必要性

- ・事業効果の発現状況から、現時点では再度の事後評価の必要性はない。

3) 改善措置の必要性

- ・現時点では、改善措置の必要性はない。
- ・今後も環境調査結果や沿川住民等の意見を把握し、必要に応じて関係自治体と協力して対応する。

4) 同種事業の計画・調査のあり方や事業評価手法の見直しの必要性

- ・当該事業の事業評価手法は妥当と考え、現時点での見直しの必要性はないと考える。

(4) 対応方針(案)

- ・目的とした事業効果を発現しており、改めてフォローアップを実施する必要はない。